地質学雑誌　第106巻　第6号（通巻1257号）付録　昭和27年6月10日第三種郵便物認可　平成12年6月15日発行（毎月1回15日発行）

日本地質学会 News

Vol.3 No.6 June 2000

日本地質学会 *News*

Vol.3 No.6 June 2000

The Geological Society of Japan *News*
日本地質学会／〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル6階
編集委員長 高橋正樹
電話 03-5823-1150 Fax 03-5823-1156
E-mail : geosocjp@ra2.so-net.ne.jp
ホームページ http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/gsj/

原稿をお寄せください ニュース誌編集室

☆表紙写真・会員の声・賛助会員のページ・各県地学会紹介・大学・研究所紹介・学協会・研究会報告・ご案内等原稿をお寄せください．☆各支部・委員会の有効なご活用いただけますよう☆ニュース誌は会員一人一人に開かれた情報交換の場です．積極的なご利用・ご活用をお待ち申しあげております．☆なお，原稿はメールかフロッピーでお送りいただけますようお願いいたします．また，打ち出し原稿をメールの方はファックスで，フロッピーの方は添付してください．

学会事務局周辺はビルの谷間に江戸情緒の残ったところです．わずかに残った土にいま紫陽花の花がピンクから深い紫に変化しています．気候の変わり目皆さまのご健勝をお祈りします．

Contents

107年年会（松江大会）予告記事訂正
35億年前の層状チャート−マーブルバー，ピルバラクラトン，西オーストラリア（表紙写真）
清川昌一……2–3
博物館紹介㉝ 大船渡市立博物館 白土 豊……4–5
地球深部探査船建設開始 奈須紀幸……6
地質科学関連学協会連合の発足について 天野一男……7
学協会・研究会報告……8–9
第15回ヒマラヤ−カラコルム−チベットワークショップ 酒井治孝・藤井理恵
紹 介……10
鈴木一久著：洪水氾濫の堆積学―礫質河川野洲川における交互砂州堆積物の形成史と堆積機構― 牧野泰彦
ご案内……11–12
「青少年のための科学への祭典2000全国大会」のご案内/「海溝型巨大地震発生帯へのバーチャル探検」のお知らせ/IGCP 450「西ゴンドワナのBase Metal堆積性鉱床」の発足と，日本人科学者にご参加の呼びかけ
各賞・研究助成……12
平成13年度東京大学海洋研究所研究船白鳳丸共同利用研究公募
公募……12
東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻地球生命圏科学講座教官の公募/姫路工業大学理学部教員の公募/東北大学大学院理学研究科地学専攻(地球物質科学科)の教官公募について
報告……13–14
地質研連（第17期・第8回）報告/日本学術会議鉱物学研究連絡委員会鉱床学専門委員会（第17期，第8回）議事録
受信箱……14
2000年度会費払込について……15
2000年版会員名簿作成についてのお願い……15
院生コーナー……16–17
評議員の抱負 廣野哲朗 研究室紹介No.11：東京工業大学・地球惑星科学・中嶋研究室の紹介
委員会だより……17
日本地質学会環境地質研究委員会：第10回環境地質学シンポジウムの開催と講演論文募集のお知らせ
支部コーナー……18–19
関東支部：講演会「地震と活断層」および2000年関東支部総会報告
関西支部：例会の報告
The Island Ircだより……19
追悼……20–21
名誉会員 橋本 亟先生を偲ぶ 菅野三郎
柴草英彦博士 藍閃石片岩論争史逸聞 渡辺暉夫
2000年度役員紹介……22–23
2001年度「日本地質学会賞」候補者募集について……24
執行委員会だより……24
2000年度第3回執行委員会
訃報……24

107年年会（松江大会）予告記事訂正

1. 表2見学旅行一覧表に間違いがありましたので，訂正いたします．B5班からB7班の「備考欄」の記事が1コラムずれていました.また，B7の「主要見学対象」の記事が不完全でした．下記のように訂正いたします．

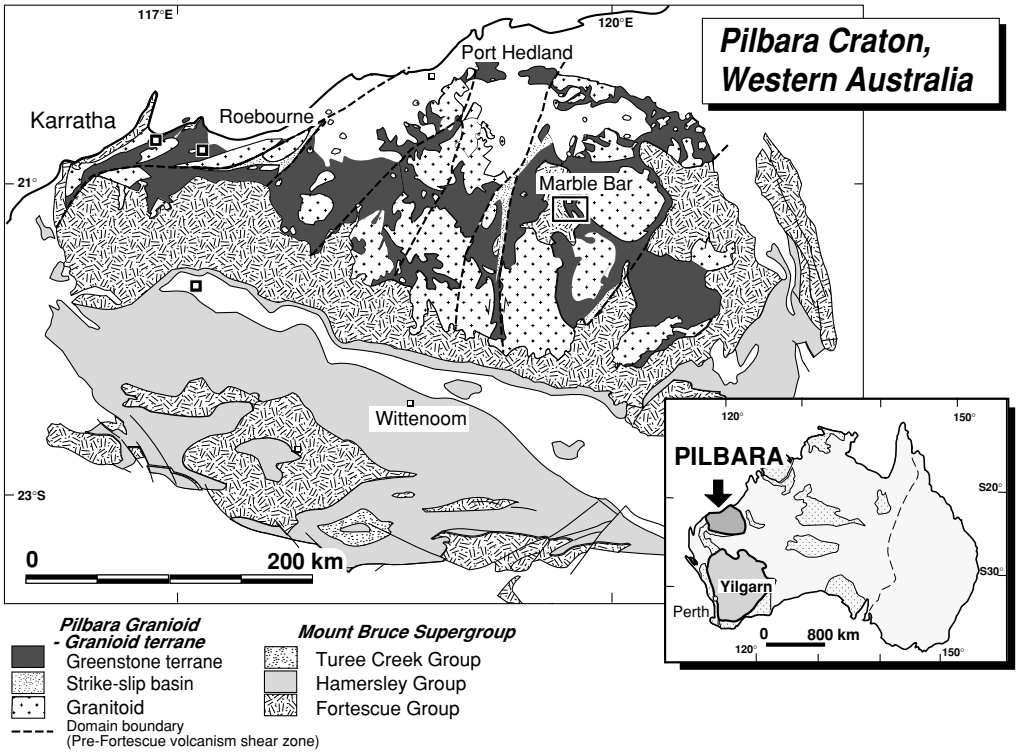
B–5 大山テフラ
備考なし．
B–6 中新統唐鐘累層
備考欄：海岸沿いの足場の悪い所に行きます．また，見学地点はすべて徒歩で回ります．足に自信のない方は参加をご遠慮ください．
B–7 隠岐島前火山
備考欄：天候によりコースが変更になる場合があります．
主要見学対象：火山活動に先駆けた石英閃長岩貫入体，焼火山をつくる火砕流堆積物と石英閃長岩貫入体との接触部，外輪山の溶岩流の積層，寄生火山の断面，降下スコリア堆積物

2. 表1セッション一覧のうち，26．変成岩とテクトニクスの世話人のメールアドレスが間違っていいました．正しくは下記のとおりです．
廣井美邦（千葉大・理）yhiroi@earth.s.chiba-u.ac.jp

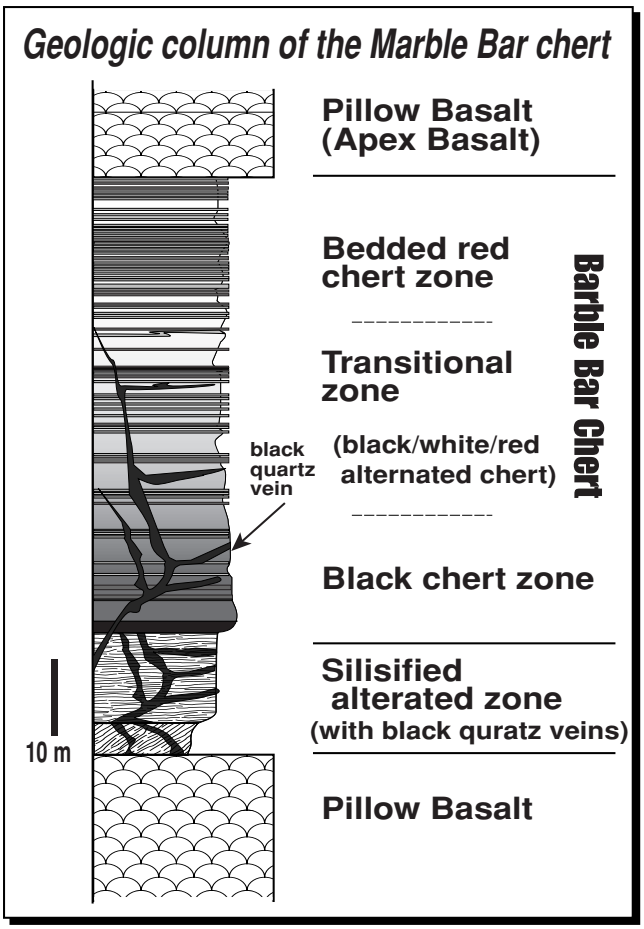
広告取扱：株式会社廣業社
〒104–0061 東京都中央区銀座8–2–9 電話 03–3571–0997

印刷・製本：創文印刷工業株式会社

表紙デザイン：渡部芳夫 レイアウト：村松雅子



第1図．ピルバラクラトンの地質図．四角がマーブルバー地域．



第2図．マーブルバーチャートの柱状図．

35億年前の層状チャート
―マーブルバー，ピルバラクラトン，西オーストラリア―

清川昌一
（国立科学博物館・地学研究部）

灼熱の太陽が照り付ける西オーストラリアのピルバラクラトン（第1図），その中でも特にマーブルバー地域は世界でも最も暑く，夏には摂氏60度近くになる．そこはスピニフェックスという鋭く尖った針状雑草しか生えていない半砂漠状態で，昼間は生き物の気配は感じられない．夕方になるとカンガルーがどこからともなく現れて活動を開始する．このピルバラ地域は赤茶けた風化土壌とスピニフェックスに被われた不毛の土地で，そこには日本の県の広さに匹敵する牧場と細々と稼行している金鉱山があるだけである．日本の北海道などからは想像できない肋骨が見えるやせた黒牛がうろうろし，鉱山の多くはゴーストタウン化している．

そんな中でマーブルバーはCoongan川沿いに年中水を貯えた水たまりを持ち，半砂漠化したピルバラのオアシスの役割を果たしている．それがバー「bar」の由来であり，たまに年輩の旅行客を乗せた観光バスなども訪れる．また，マーブル［marble］は，その名前から想像できる大理石ではなく，写真に見られるような非常にカラフルな層状チャート（ジャスパー：jasper）の外見のすばらしさから名付けられたものらしい（表紙写真）．読み難い地名が多いピルバラ地域だが，このなじみ深い地名は1800年代後半のゴールドラッシュでやってきた白人達が，憩いをもとめてこの地に立寄って名付けたのであろう．

さて，西オーストラリアの北西部に分布するピルバラクラトンは太古代35–30億年前に形成し，「初期地球のなぞ」を含む地質帯である．ここでは，オーストラリアはもちろん，アメリカ，オ

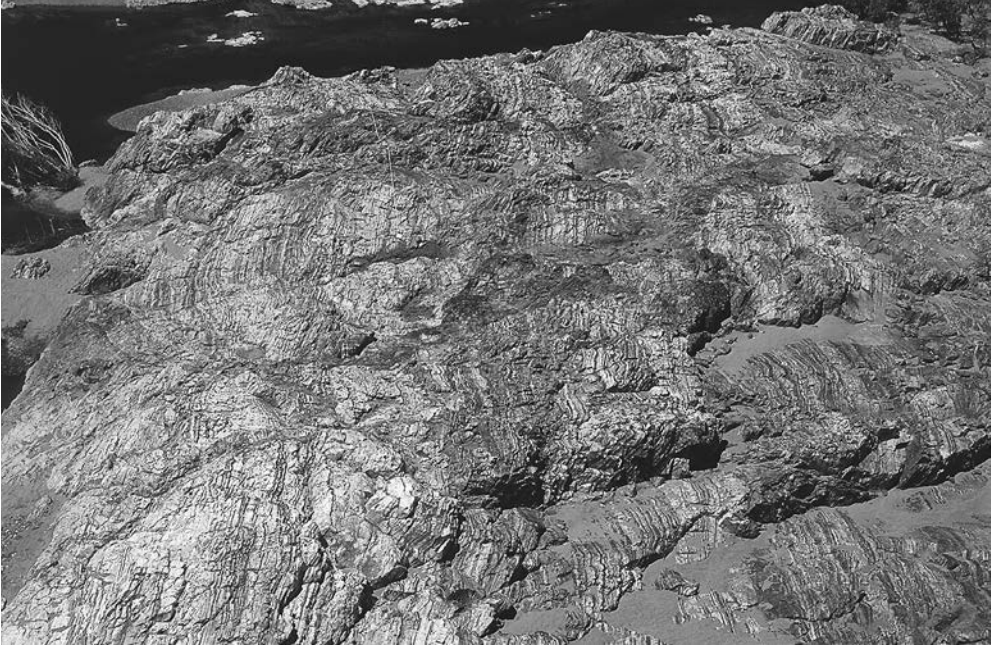
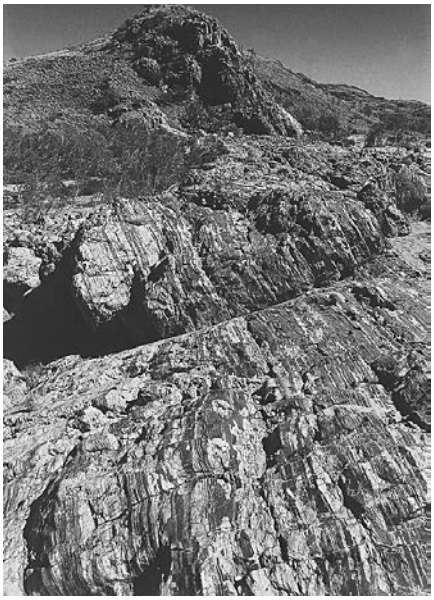


写真1．マーブルバーチャート下部黒色チャート，漸移帯．層状チャート中に網目状に黒色珪質脈が貫入する．右側が上位．表紙のがけの上から河床を撮ったもの．赤いチャート層は図の右側に分布する．



表紙写真

ランダ，日本など世界中から研究者が訪れ，地質調査・サンプル分析研究が行われている．特にマーブルバー地域はピルバラ地域でも最も古い地域（約35億年前）で初期大陸の形成や当時の環境，生命の起源などを探る上で，地球上に残された最も保存状態の良い地域である（世界的にもっと古い地層はあるが，後の変形変成を被り初期状態は悪い）．

マーブルバーチャートは35億年前のワラウーナ層群中の地層で，層厚は70 m，下位から熱水変質帯，黒色チャート帯，漸移帯，上部赤色チャート帯に区分できる（第2図）．チャート層は厚い玄武岩角礫岩/枕状溶岩上に整合的に重なる．枕状溶岩最上部からチャート層にかけての10数メートルは珪質変質帯で，熱水起源と考えられる黒色石英脈が大量にみられる．変質帯の上位は黒色チャート，白色/黒色互層，白色/赤色互層を経て，赤色層状チャートに移り変わる．最上部はApex玄武岩と呼ばれる枕状溶岩に整合的に被われている．

赤色層状チャートは日本でもなじみ深い岩石であり，その起源は放散虫が深海底で静かに堆積したものが付加作用で付加体中に取り込まれたものと思われている．マーブルバーチャートも一見放散虫チャートに非常に似ているように見える．しかし，詳しく観察すると一枚一枚のチャート層の間には泥などの挟みはなく漸移し，また，下部の変質帯の黒色石英脈と同じ脈が層状チャート中に岩脈・シル状に貫入する（写真1）．下位の石英脈の存在，チャート中にも同様の脈があることより，この層状チャートの沈殿は熱水活動が盛んに起こっているところで，比較的短時間で行われたと考えられる．本地域の玄武岩類は海洋地殻説や島弧説など議論されているが，いずれにせよ当時の海底では盛んな熱水活動が起こり，珪質堆積物が大量に沈殿していたと考えられる．

次に，視点を鮮やかなチャートの色に向けてみよう．そこに初期生物の活動の可能性をうかがい知ることができる．マーブルバーチャートから直線で1.5キロ，層序で50 m上位の黒色珪質頁岩層（Apex chert）からJ.W. ショップ博士が世界最古のバクテリアの化石を報告した（Schopf and Packer, 1987 ; Schopf 1993）．（日本でも磯﨑行雄氏のグループが数十キロ離れたノースポールで報告している）．Apex chertより少し古いマーブルバーチャートの層序の特徴からも生命の息吹が感じられる．黒から赤に移り変わるチャートの色は熱水活動で繁茂した有機物であるバクテリアが何らかの形で酸素を放出し，当時海中に豊富に溶けている二価の鉄を酸化したためだろうと考えられる．物語りとしては，現在の深海底などの熱水の周りには現在のホワイトスモーカー周辺のようにバクテリアが集まり，その死骸として黒色チャートを沈澱させる．黒色頁岩起源の生物は，何らかの形（たとえば，光合成，硫酸還元菌の作用）で酸素を放出し，鉄に富んだ海水に赤色チャートを堆積させた．写真の赤いチャートはまさに当時の酸素を吸収した鉄の色である．このような，熱水起源のバクテリア化石は32億3500万年前の地層（Pilbara, Sulphur Springs地域）から報告されている（Rasmussen, 2000）．

マーブルバーチャートの成因は，現在の海嶺などで起こっている深海底形成説や，もっと浅い大陸縁辺でできたと考えているグループもある．太古代の時代は地球上に大陸地殻非常に少なく，当時はどこでもいわゆる「遠洋性」環境であり，また当時の海の深さも今のところ明らかでない．不思議なことに，ピルバラにある層状チャート，もしくは縞状鉄鉱層の多くは太古代の後期にいたるまで，この黒色頁岩から赤色チャート（もしくは縞状鉄鉱層）に移り変わる層序「黒色頁岩–赤色チャート（縞状鉄鉱層）シークエンス」を持つことが明らかになってきた（清川，2000）．すでに，35億年前にも熱水活動海域が非常に浅くて，そこでできた生物（シアノバクテリア？）は光合成を行っていたのかも知れない．いずれにしても，このマーブルバーに代表されるチャート層は太古代当時の地球表層での活動を記憶し，また生物活動や酸素発生についての鍵を握っている重要な地層なのである．

文　献

Isozaki, Y., et al., 1998, AGU fall meeting abstract, SanFrancisco.

清川昌一，2000，太古代の世界―ピルバラクラトンからのメッセージ，地学雑，109，130–139.

Rasmussen, B., 2000, Filamentous microfossiles in a 3235-million-year-old volcanogenic massive sulphide deposit. *Nature*, 405, 676–679.

Schopf, J.W., Packer, B.M., 1987, Early Archean (3.3-Billion to 3.5-Billion-year-old) Microfossiles from Warrawoona Group, Australia. *Science*, 273, 70–73.

Schopf, J.W., 1993, Microfossils of the Early Archean Apex Chert: New Evidence of the Antiquity of life. *Science*, 260, 640–646.

大船渡市立博物館

学芸員　白土　豊

はじめに

当館沿革誌の冒頭には，『一　設立年月日，昭和三十年四月．二　設置の場所，大船渡市大船渡町字笹崎十一番地の二．三　博物館の設備，館に充当された建築物は元大船渡町の役場であった．当時大船渡職業安定所であったがその階上が当てられた．四　名称，大船渡市立科学博物館と称する．五　職員，専任職員として千葉金作氏，非常勤学芸員として山田弥太郎氏，東登氏が任命された．』と記されている．

博物館法制定から4年後に当館は活動を開始し，昭和41年8月には，岩手県第2号の登録博物館となる．第1号は南隣の陸前高田市立博物館なので，ここ気仙地方では岩手県内でも早くから博物館活動を立ち上げてきた歴史がある．

昭和57年7月，市制施行30周年を記念して，大船渡市の南東端となる末崎町の碁石海岸に新館が建設された．

碁石海岸は南三陸の景勝地で，昭和12年に国指定の名勝および天然記念物に，昭和41年には陸中海岸国立公園に拡大指定された．昭和44年には「穴通磯（あなとおしいそ）」が陸中海岸15円切手の図案にもなっている．碁石海岸一帯は，白亜系大船渡層群船河原層，飛定地層の分布地域であり，いわゆる「碁石」のように見える石の原岩は，これらの層の黒色頁岩である．

当館活動は，A博物館資料の普及と活用，B博物館資料の蓄積と保存，C博物館経営の環境整備に大別され，それぞれ以下の事業を展開している．

地質展示室

A 博物館資料の普及と活用

＜常設展示＞

常設展示の総合テーマは「大船渡　その海と大地」．入館すると最初にシアターでDVD映像による約6分間の展示概要案内を見ることができる．市内に所在する国/県指定の記念物は，この映像の中に織り込んで紹介している．

次は地質展示室．「地球の歴史と大船渡」，「足もとの4億2000万年」，「石灰岩の生いたち」，「せりあがる海底」，「恵まれた自然」と5つのコーナーがあり，高さ6メートルに及ぶ3つの巨大な地層レプリカがシンボルとなっている．大船渡には南部北上帯を構成する主要な地層がほぼ揃って分布しており，その地層ごとに産出する化石や岩石を約600点展示する．ほとんどが露出展示なので，資料は詳細な観察が可能である．なお，パソコンを用いた三択式「化石クイズ」も設置してある．

次は考古・民俗展示室．コーナーは「縄文時代の気仙地方」「貝塚は語る」「大洞文化」「磯どり・見突き漁」「釣漁」「網漁」「荒れ狂う海・津波」「海をあがめる」「語りつがれる海」と続く．国指定史跡「蛸ノ浦貝塚」貝層断面や二隻の磯船，電磁式直視地震計も見ごたえがある．

＜企画展示・特別陳列＞

当館の活動部門は，考古・歴史・民俗・地質・生物の5部門であり，人文系と自然系の2名の学芸員で，概ね隔年で各自担当分野の企画展示を開催する．

新館開館以降に自然系が行ったこれまでのテーマは以下のとおりである．

「日本の地下資源」（1983）
「岩手の地鶏」（1983）
「おにまるの化石」（1989）
「化石の見かた」（1994）
「三陸海岸の野生動物」（1995）
「碁石海岸の植物」（1997）
「サンゴがすんだ海・大船渡」（1999）

特別陳列は，主に収蔵資料の公開を中心とし適宜行っている．

＜教育普及＞

体験学習，自然観察，学習指導，タイアップ事業，利用促進事業，文化活動の支援，主管外活動への協力などを行う．体験学習/自然観察では以下の実績がある．

・「たいけん！博物館」（4月）
　館内にある，通常非公開施設の見学
・「海辺の生物観察会」（5月）
　末崎町大浜海岸での潮だまりの観察
・「植物観察会」（6月）
　大船渡町，赤崎町，末崎町等での観察
・「縄文土器製作会」（7，8月）
　館内での形づくりと屋外での野焼き
・「拓本講習会」（9月）
　館内での講習と野外での実習
・「五葉山動物観察会」（10月）
　日頃市町赤坂峠での野生動物の観察
・「地質観察会」（11月）
　日頃市町，盛町，大船渡町等での観察

＜常設展示改修＞

平成2年度に新館開館10周年を期した常設展示改修実施設計を行い，平成3～5年度に計画の約6割を施工した．この改修では主に展示面積の増加と演示方法の改良を図った．

地質展示室内に「恵まれた自然」コーナーを追加して生物関係の展示を拡充し，あわせて化石標本の演示方法を変更した．

また，たいけんコーナー新設し，館内の展示品を探して質問にこたえる「はっけんカード」，館内の気に入った展示品を自由にスケッチできる「スケッチシート」を整備した．この2つは，小学生の団体見学時によく利用されている．さらに，顕微鏡を自分で操作して大きくみるコーナーや，展示品に自由に触ることができるコーナーも設けてある．フズリナ，有孔虫，花崗岩，ホルンフェルス，花粉，葉柄断面等の薄片は，市内の資料を活用した手作りである．

平成10年度には，新館開館20周年を期

スケッチシートの展示状況

碁石海岸「穴通磯」

舘ヶ崎角岩岩脈

した常設展示改修として，展示映像設備の更新を計画し，10，11年度にわたって館内5か所全てを更新した．2次資料に過ぎない映像設備への投資には異論もあったが，ソフト上での展開性を重視しつつシステムは単純化するなど，映像のもつ長所活用と短所克服を図った．

入館して最初に見るシアターでは，常設展示のあらましを6分間のDVD映像で紹介する他，第2，4土曜日に「子ども放送局」を放映できるなど，各種映像ソースを映写可能なシステムを構成し，シアターの機能を大幅に向上させた．

地質展示室には，大島造山運動を説明するビデオ「海底から山脈が」があったが，パソコンによる「化石クイズ」に衣替えした．意図的に三択ボタンの解答方式を採用するなど単純化したため，大人から子どもまで楽しくチャレンジしてもらっている．

考古・民俗展示室には，MD再生による昔話や伝説を聞くことができる「語り継がれる海」等を設けた．

B 博物館資料の蓄積と保存

＜収集保管＞

博物館資料の収集，博物館資料の整理，博物館資料の保管に取り組んでいる．

収集は，気仙地方（大船渡市，陸前高田市，三陸町，住田町の二市二町）の自然や文化を理解する資料を収集する．

整理では，既存の手書きによる資料受入票，資料登録原簿を様式ごと電算化し，「博物館資料管理システム」として富士通と共同開発したオリジナルシステムを活用している．しかし，開発した平成7年当時のOSがそのままであり，バージョンアップに対応させることが今後の課題である．

保管では，毎年5月に燻蒸を行っているが，エキボンガス高騰が影響し予算内での施行範囲が狭くなってきた．安価な代替ガスが待たれる．

＜調査研究＞

平成11年度は，「岩手の信仰碑の研究」「大船渡地域の地質分布の研究」「大船渡地域の植生分布の研究」の3つに取り組んでおり，平成12年度からは新たに「大船渡地域の海棲生物の研究」が加わった．それぞれ，共同研究者や当館で委嘱した専門研究員の協力を得ている．

なお，これまで紀要は出していないが，研究報告書として以下を刊行している．

『蛸ノ浦貝塚調査報告書』（1987）

『三陸沿岸地震・津波年表』（1990）

＜図書刊行＞

企画展示図録や調査研究報告書の他に，普及解説書的な図書も刊行している．

新館開館時には，展示案内と施設案内を兼ねた『ガイドブック』を作成した．平成9年度には，「大船渡地域の植生分布の研究」の区切りとして，海岸部の植物相調査結果をまとめ，植物写真が主体の『大船渡の植物Ⅰ～海岸編～』を刊行した．

なお，今年度には上記ガイドブックの新版として，博物館利用の総合案内書を刊行予定である．また，映像情報発信として，更新したばかりの常設展示の案内映像をVHSビデオテープにダビングして配布する計画もある．

C 博物館経営の環境整備

＜一般管理＞

博物館協議会の開催，施設の各種管理業務委託，博物館活動の広報等を2名の事務職で担当している．

紙面の都合で詳細は割愛する．

おわりに

市内に3つある国指定天然記念物『碁石海岸』，『舘ヶ崎角岩岩脈』，『樋口沢ゴトランド紀化石産地』を簡単に紹介してみたい．いうまでもなく，いずれも地質現象にゆかりが深い．

『碁石海岸』は昭和12年の指定で，冒頭でも触れたように観光地であるが，白亜系大船渡層群のさまざまな海食地形がみごとな景観を造り出している．碁石岬，雷岩，乱曝谷，巾着岩，穴通磯などの観光をかねて，砂岩頁岩互層，礫岩，溶結凝灰岩や厚歯二枚貝，三角貝，巻貝等の観察を主とした巡検ができる．

『舘ヶ崎角岩岩脈』は昭和14年に指定された，白亜系大船渡層群中に貫入した堆積岩脈（チャート）である．現地には海食崖をロープ伝いに降り，干潮時を見計らって行かなければならないので，心構えが必要である．砂岩頁岩互層や礫岩，岩脈のすぐ脇には逆断層も観察することができる．

『樋口沢ゴトランド紀化石産地』は，昭和32年に指定された．言わずと知れた本邦シルル系の最初の発見地である．発見者の故小貫義男先生が当館に寄せた私信によると，最初に化石を発見したのは樋口沢右岸であったそうだ．東北大学理学部自然史標本館に残る川内層サンゴ標本も，右岸側支流であるヤマナス沢産が多い．

樋口沢は，入口の氷上花崗岩にはじまりシルル・デボン・石炭各紀の地層が観察できる，夢のような数キロコースである．

利用案内

所 在 地：〒022-0001 岩手県大船渡市末崎町字大浜221-86
連 絡 先：電話 0192-29-2161
Fax 0192-29-2162
開館時間：午前9時から午後4時30分まで
（入館は午後4時まで）
休 館 日：毎週月曜日（休日の場合は火曜日），祝日
年末年始（12月28日から1月4日）
資料整理日（2月1日から2月7日）
入 館 料：大人 300円（250円）
高校生 150円（100円）
小中学生 100円（50円）
*（ ）内は20名以上の団体入館料
交通案内：公共機関利用
南方面から
JR東北新館線 一関駅下車
JR大船渡線乗換え 細浦駅下車
岩手県交通バス「碁石海岸」行きで
終点「碁石海岸」下車 徒歩1分
北方面から
JR東北線 盛岡駅下車
岩手県交通バス「大船渡」行きで
大船渡市内下車
岩手県交通バス「碁石海岸」乗換え
終点「碁石海岸」下車 徒歩1分
車利用
東北自動車道一関I.Cから約2時間
市内（JR大船渡駅）から約20分

「地球深部探査船」
建造開始

奈須紀幸
（名誉会員・海洋科学技術センター
評議員会議長）

過去十数年に亘り，科学技術庁とその傘下の海洋科学技術センターは連携して日本のライザー付深海掘削船の建造を実現するために努力を重ねてきた．その努力が実って，建造予算が政府の承認するところとなり，去る3月27日，海洋科学技術センターは，三菱重工を主担当造船所と指定して建造契約を締結した．船位保持に関する部分は，三井造船の分担とすることも併せ指定した．

翌3月28日，科学技術庁においてプレス発表を行い，建造計画の内容を公表した．これは，日本のみならず，世界の惑星地球科学分野の研究者にとっての朗報であると同時に，地球の真の姿を4次元的に解明する一助ともなるので，人類の将来の生存にも関連する社会的貢献の視点からも朗報と言うべきであろう．

深海掘削計画は，1961年より米国主導の下に開始され，1975年からは国際深海掘削計画として国際化され，今日まで，計り知れぬほどの成果を挙げてきた．ただ，通常の海底石油・天然ガス掘削のライザー付掘削プラットフォームや掘削船と異なり，ライザーなしのドリルストリング（単管）を使用してきた．深海掘削の成果とその重要性にかんがみ，日本の産官学の関係者の間で，十数年前より，日本でも深海掘削船を建造し，国際協力に供しようとの動きが活発になった．

米国では，深海掘削計画をDSDPと総称しているが，国際化されてから，グローマー・チャレンジャー号を使用した期間，計画をIPODと称し，一回り大きなジョイデス・レゾリューション号を使用した現在に至る期間，計画をODPと略称してきた．日本のライザー付深海掘削船が実現した暁，米国のライザーレス掘削船との2船体制で国際深海掘削計画を推進する計画を日本ではOD21と称し，米国はじめ現行ODPグループ（日本も入っている）との調整を進めてきた．

ODPグループは，日本からのOD21提案を受けて，IODP（The Integrated Ocean Drilling Program）を組織した．現行ODPは2003年で一応終了する．その後の日米2船，あるいは欧州が建造すれば多船体制となる場合も視野に入れて，将来計画を練り始めた．従って，現行はODP，日本提案はOD21，ポストODPはIODPと理解すれば分かり易い．

日本地質学会では，昨年1999年3月26・27の両日，早稲田大学国際会議場で，現行地質過程部会，海洋地質部会の提案で，「21世紀の地球科学と深海掘削」と題するシンポジウムを開催した．英訳は“Earth Sciences and Ocean Drilling in the 21st Centry”であり，まさにOD21を主題とするものであった．この段階では，日本の深海掘削船の建造予算はついていなかった．したがって，学界として建造を推進する必要性をうたう意味があった．シンポジウムの内容は，1．ODPからIODPへ，2．ライザー掘削船の設計，3．大水深石油掘削技術の動向と展望，5．地震発生帯への掘削，6．統合深海掘削計画（IODP）における国内研究・運営体制について，という6テーマに大別して活発な議論が交換された．講演要旨は，日本地質学会第106年総会・討論会として印刷されている．

プレス発表に際して発表された地球深部探査船の主要目は次のようになっている．全体の配置の概要については下図を参照されたい．

全長	210 m
幅	38 m
深さ	16.2 m
計画満載喫水	9.2 m
最大稼働水深	2,500 m
ライザー長	
将来は	約4,000 m
ドリルストリング長	10,000 m
将来は	12,000 m＊
ライザー径	21インチ
主発電機	5,000 KW×6基
補助発電機	2,500 KW×2基
DPスラスター	4,100 KW×6基
	2,500 KW×1基
最大搭載人員	150名
（内，研究（含補助）員：51名）	
満載排水量	約60,000トン＊

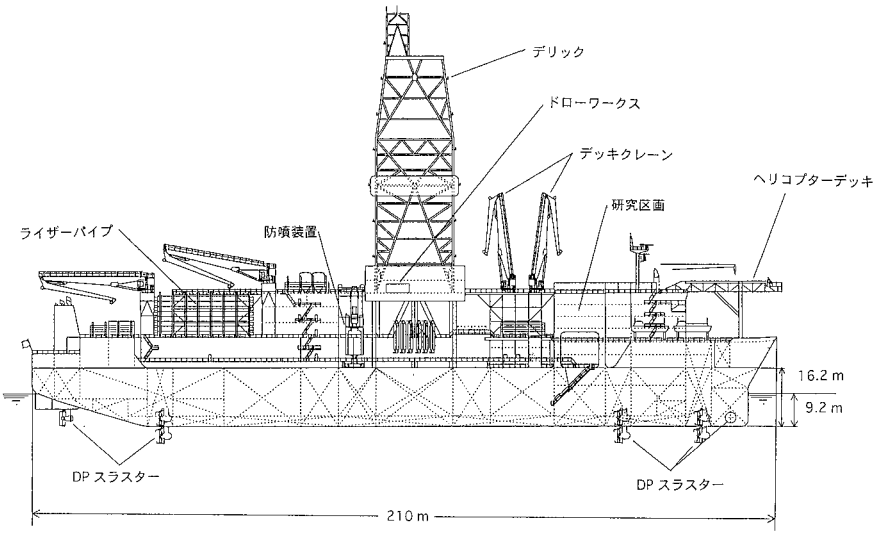
（＊は，海洋科学技術センター・2000年3月30日発行の”OD21ニュースレターVol．3より抜粋）

なお，比較のためにジョイデス・レゾリューション号の諸元を下記に示す．

全長	143 m
幅	21 m
総トン数	9,799トン
排水トン	18,600トン
やぐら高	62 m
速力	13ノット
ドリルパイプ全長	1万フィート（9,144 m）
ライザー	なし

新しい地球深部探査船とジョイデス・レゾリューション号の全長と幅を比較して頂けると，両船の大きさの違いについてのおおよその見当がつく．地球深部探査船は，スラスター関連の工事の関係から，船体の主要部分は三井造船の玉野造船所で建造，進水し，三菱重工の長崎造船所に廻航して，掘削部分を建造搭載し完成することに両社で相談・合意した．完成は，2004（平成16）年の予定である．日本周辺での完熟訓練を行うので，国際的な活用に入るのは，完工の数年先となる予定である．

以上，日本地質学会にとっても朗報であるのでお知らせする．



地球深部探査船の概略配置図（海洋科学技術センターのプレス発表による）

地質科学関連学協会連合の発足について

本年3月27日に日本学術会議で地質科学連合の創立集会が開催され，本学会から天野（1999年度第一庶務委員長）が出席しました．この集会で，討議の結果，同連合が発足することとなりました．今期の日本学術会議を通じて関わってこられた地質科学総合研連の鎮西清高委員長から，このほど，当日の議事録，当日承認された連合設立の主旨，連合の組織と活動を含めて，関係学協会会長宛に報告が寄せられたので，以下に全文をご紹介します．

（天野一男）

平成12年5月24日

地質科学関連学協会連合
加盟各学協会長殿

地質科学総合研連
委員長　鎮西清高

地質科学関連学協会連合創立集会のご報告

地質科学関連学協会連合は，去る3月27日，同封の議事録のように日本学術会議で開催され，発足致しました．ご報告が遅くなりましたことをお詫びいたします．各位には既に貴会からの代表で出席された方よりご報告があったことと存じます．

同封物の中にこの連合設立の主旨などがありますが，ニュース等にて会員の皆さまにお知らせ下さるようお願いいたします．

なお，今後は，集会の折りに指名された学会からの代表6氏により運営されることになります．集会の折りには代表者のお名前が確定されなかった3学会を含めて，以下に改めてご報告いたします．

天野一男　日本地質学会
有馬　真　日本岩石鉱物鉱床学会
大路樹生　日本古生物学会
伊達二郎　東京地学協会
松川正樹　日本地学教育学会
三谷　哲　日本応用地質学会

（五十音順，敬称略）

以上

――――――――――――――――――

地質科学関連学協会連合創立集会　議事録

2000.04.20承認

日時：平成12年3月27日　13時30分～16時00分
場所：日本学術会議第7部会議室
出席学会および出席者：資源地質学会（鹿園直建），地学団体研究会（宮地良典），東京地学協会（佐藤　正），日本応用地質学会（田中芳則，三谷　哲），日本古生物学会（北里　洋），日本情報地質学会（正路徹也），日本第四紀学会（鈴木毅彦），日本地下水学会（長瀬和雄），日本地学教育学会（高橋　修），日本地質学会（天野一男），日本地熱学会（玉生志郎），日本粘土学会（山崎淳司），以上12学協会
欠席学会：日本岩石鉱物鉱床学会，日本鉱物学会，日本地形学連合，以上3学会
その他の出席者：地質科学総合研連（太田陽子，木村　学，斎藤常正，鎮西清高，山中高光，吉岡龍馬）
座長：鎮西清高（地質科学総合研連委員長）
議事
⑴　経過報告：
日本地球化学会から，地球化学の立場から考えて連合への参加を見合わせるが，情報は流してもらいたいとの回答があった．また，日本火山学会から，会員の多くが地質科学の専門でないので参加は見送り，オブザーバー参加を検討するとの回答があった．
⑵　地質科学関連学協会連合の設立の決議：
「地質科学関連学協会連合設立の主旨」（別紙）の文章を修正，これを承認し，これをもってこの連合設立の決議が可決されたとした．
また，この連合の名称をどう定めるかに付いて討議し，標記の通り「地質科学関連学協会連合」を正式名称とすることに決した．
⑶　地質科学関連学協会連合の組織・運営と活動の内容について
この学協会連合の組織・運営の規約は連合の設立後に参加学協会の合議によって定めること，および連合の活動では，重要課題については課題毎に参加学会の意見を徴して行動すること，という基本方針を確認し，別紙の活動内容メモを承認した．
⑷　幹事学会の選出
この連合の当面の運営は複数の幹事学会が行う．幹事学会の主たる責務は，連合の運営規約案の作成と提案にあることが確認され，以下の5学協会（幹事）が指名された．
日本古生物学会（大路樹生），日本地学教育学会（松川正樹），日本地質学会（天野一男），日本応用地質学会（幹事未定），東京地学協会（幹事未定）．
また，このほか，欠席の日本岩石鉱物鉱床学会に幹事学会となるよう要請することになった．

（以上）

――――――――――――――――――

地質科学関連学協会連合設立の主旨

近年，地球とその歴史に対する人々の知的関心が非常に高まっている．また，人類の将来を左右する緊急の課題であるエネルギーおよび地下資源の確保，環境保全，地域開発，自然災害の予測と防止など，地質科学が担うべき課題は多い．地質科学は，自然物や自然現象を対象とし，その情報を長大な時間軸上で扱うという方法論上の独自性をもっている．地質科学が蓄積してきた地球に関する知識と技術が正当に評価され，広く利用されることは社会にとってきわめて重要である．

地質科学の重要性が学術的にも社会的にも著しく増しているにも係わらず，現状はそれが正当に評価されているとは言えず，小中高校や大学での地質科学の教育も次第に縮小の傾向にあり，地質科学を支える基盤はきわめて脆弱になりつつあると言わなくてはならない．いっぽう，このような状況に対し，地質科学関連学協会等からの働きかけも，これまで十分であったとはいえない．

我々は，各学協会それぞれの学術的活動に加え，力を合わせて地質科学の発展に資する活動，地質科学者の社会的責任を果たす活動を進めるため，ここに関連学協会の連合を結成する．この連合体が参加学協会の間を繋ぎ，情報・意見を交換し，その力を結集する組織として活動することを期する．

2000年3月27日

資源地質学会　地学団体研究会　東京地学協会　日本応用地質学会　日本岩石鉱物鉱床学会　日本鉱物学会　日本古生物学会　日本情報地質学会　日本第四紀学会　日本地下水学会　日本地学教育学会　日本地形学連合　日本地質学会　日本地熱学会　日本粘土学会（五十音順，15学会）

――――――――――――――――――

地質科学関連学協会連合の組織と活動について

2000年3月27日
地質科学関連学協会連合

この学協会連合の結成に当たり，当初，我々は連合規約案を成文化することをやめ，以下のように組織と活動の輪郭を描くにとどめ，規約は，設立後に参加学協会の合議によって定めることとした．

「組織」
この連合は，地質科学とそれに関連する分野の学協会（学術研究団体）によって構成する連合体である．参加・脱退は各学協会の自由意志とする．

「活動」
連合は地質科学の視点から社会への貢献を目指し，情報の交換，地質科学の基盤を強固にするための社会的活動，地質科学教育振興のための活動，これらにつて関係各方面への働きかけなどを行う．また多くの学協会に共通する学術的課題について，あるいは地質科学の普及と振興を目的として，シンポジウムや講演会などを開催する．

「運営」
運営形態や運営規約は，連合発足後に討議する．当面は，幹事役に当たる複数の学協会を選出し，その学協会が中心となって規約の提案と連合のスタート時の運営を行う．連合の運営に関して，上記の活動方針以上に具体的に定めることをせず，課題ごとに参加学協会の意見を徴して行動する．

（以上）

学協会・研究会報告

第15回 ヒマラヤ−カラコルム−チベットワークショップ

写真1　ワークショップの晩餐会で第1回の討論会のことを語るオックスフォード大学のMike Searle氏（在田一則撮影）

第15回ヒマラヤ−カラコルム−チベットワークショップ（15th Himalaya-Karakoram-Tibet Workshop；略称HKT）が2000年4月22日から4月25日まで，中国の成都で開催された．本ワークショップは毎年3月あるいは4月に開催されている，ヒマラヤ−カラコルム−チベット地域の地球科学的研究に関する唯一の討論会である．今回は15か国から200人余りの研究者が参加した．その内日本からの参加者は次の8名であった：在田一則（北大），松岡　篤・小林健太（新潟大），サイモン・ウォーリス（京大），酒井治孝・舟川　哲・藤井理恵・高橋孝三（九大）．プレワークショップ巡検は，成都の西方，チベット高原の東縁部に位置する松潘−甘孜（Songpan-Garze）地帯で，4月15日から20日まで行われた．またラサ−カトマンズ間のポストワークショップ巡検が，4月26日から5月4日まで行われた．ワークショップ前日の21日には，招待講演会が開催された．私はワークショップと学会前の巡検に参加したので，ここにその様子を報告する．

ワークショップ：

今回のワークショップは，中国科学技術省と国土資源省の強力なバックアップの下に開催された．現在中国では，青海−チベット高原の開発のため，チベット全域をカバーする25万分の1地質図の作成やタリム盆地の石油開発，人工地震による地殻深部構造の解析など，多くの国家プロジェクトが進行中であり，それらの膨大な研究成果の発表が本ワークショップの目玉であった．最近まで秘境といわれていたような，チベット高原北部のココシリ地域やブラマプトラ河が大きく屈曲するアッサム奥のシンタックス地域などの研究成果が続々と発表された．

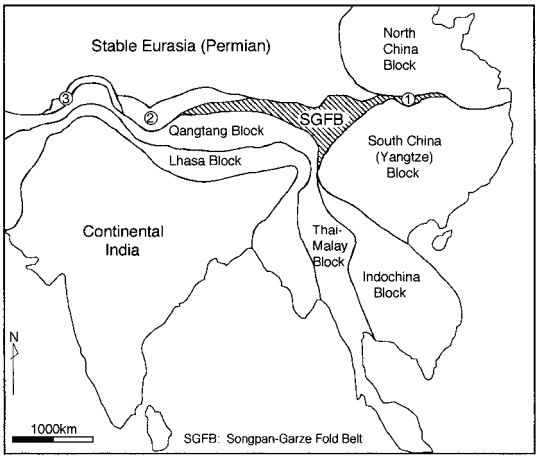
ワークショップの会場は，成都の中心にあるチベットホテルの最上階であった．参加者のほとんどがこのホテルに宿泊し缶詰状態で，連日朝8時から夕方6時まで講演，そして夕食後7時過ぎから9時過ぎまでポスター発表というハードスケジュールであった．またポスターセッションは，17階の講演会場外の屋上にテントを張って行われた．そのためにポスターは雨風に4日間曝されることになり，急遽ビニールカバーをかぶせる講演者もみられた．

ワークショップの実質的な第1日目は，11人の招待講演者による特別講演であった．私もその一人として，エベレスト頂上直下のデタッチメント断層とその活動時期および頂上から産出した三葉虫などの化石について講演した．昨年テレビ放映された「チョモランマの渚」のハイライトのVTRも見てもらったが，講演後「コピーが欲しい」という要望が相次いだ．日本からは在田一則氏が，ネパールヒマラヤのMCT Zoneとその変成帯の上昇にまつわるテクトニックな意義について講演した．招待講演で最も議論が沸騰したのは，フランスのTapponnier氏によるチベットの上昇と進化についての話であった．彼は高く平坦なチベット高原の形成には，6つの主要な横ずれ断層（カラコルム，アルチンター，クンルン，レッドリバー断層など）が大きな役割を果たしていることを強調し，各々の活動期間，活動速度，地下構造を総括した．アルチンター断層の直下には−8％の低速度ゾーンが深さ約200 km，幅約100 kmで広がっており，プレート境界断層に匹敵すると指摘した．しかし，横ずれ断層でチベット高原の平坦な地形は説明できても，その上昇は説明できないとして，チベットの地殻が厚く，熱く，柔らかく，堆積盆地の年代が北に若くなることを説明するために，チベット高原下での南向きの沈み込みを想定した．インダス−ツァンポー縫合帯より北に位置する，3つの縫合帯（バンゴン，テンシャン，クンルンの各縫合帯）で，衝突された大陸が南方に沈み込むモデルを提唱し，それによってチベット高原北部の火山活動を説明することを試みた．

2日目からの一般講演は，地域によって区分された8つのセッションで行われた：1. ヒマラヤの地質，2. カラコルムとパミールの地質，3. 縫合帯の地質，4. チベット高原内部の地質，5. チベット高原北縁の地質，6. チベット高原東縁の地質，7. チベット高原と周辺地域の地質の総括，8. 地球規模の気候変動と青海−チベット高原である．「地質」という言葉で各セッションがくくられてはいるが，地震波速度構造，磁気・重力異常，トモグラフィーなど地球物理学的な研究成果も数多く発表された．講演要旨は中国地質科学大学のEarth Science Frontiers，第7巻増刊号として出版され，その総ページ数は452ページに達した．講演が最も集中し，活発な議論がされたのは，アルチンター断層を初めとするチベット高原の横ずれ断層とそれに伴うプルアパート盆地堆積物の研究，およびチベット高原・クンルン山地の若い火山活動に関する発表であった．4日間のワークショップの最後の講演は私達の論文の発表であった．カトマンズ盆地堆積物の花粉分析に基づく，ヒマラヤ地域の過去250万年の古気候変動について藤井が発表し，インド南西モンスーン気候下にあるヒマラヤからの初めての連続的な古気候データと評価された．

ワークショップの最後に，来年の開催国について議論され，オーストリアのグラーツで開催されることが決定した．さらに2002年はインド，2003年は日本，2004年はオーストラリア，2005年はネパールと各国が次々に立候補した．日本開催に対しては，「expensive!」という声が聞かれたが，一方で「国の威信を懸けてやる必要はないんだ．簡素なベッドと食事でいいんだ」という声も聞かれた．その後国土資源省の副大臣を迎え，盛大な晩餐会が開かれた．次々に出てくる素晴らしい中華料理と歌と踊りのショー，そして客をもてなす演出に一同すっかり飲み込まれてしまった．挨拶に立ったオックスフォード大学のMike Searle氏が，「15年前，レスター大学の小さな教室でビスケットとお茶で始まったHKTワークショップが，こんなに大規模になり，こんなに素晴らしい晩餐会を開くようになるなんて…」と感慨深げに語っていたのが印象的だった（写真1）．

Searleらの呼びかけにより1985年から始まった本ワークショップは，当初はヨーロッパ各大学の持ち回りで，殆ど欧米人研究者の



第1図．松潘－甘孜（Songpan-Garze）褶曲帯のテクトニックな位置
1．秦嶺造山帯，2．クンルン褶曲帯，3．パミール褶曲帯

みで開催されていた．1994年にカトマンズで開催されて以来，ヒマラヤの国でも開催されるようになったが，その際には地元研究者が大勢発表し，議論が充分に行えないという声が挙がるようになった．今回もその傾向があり，欧米からの参加者には不満の声があったのも事実である．

なお，本ワークショップで発表された論文の一部は，EpisodeおよびJournal of Asian Earth Scienceの特集号として出版される予定である．

プレ野外巡検：

広大なチベット高原と九州・四国がすっぽり入ってしまう四川盆地に挟まれた逆三角形の地域が，今回巡検の対象となった松潘－甘孜（Songpan-Garze）褶曲帯と竜門山（Longmen Shan）スラスト－ナップ帯である．この地域の東側には華南を構成する揚子地塊，西側にはチベット高原の主体を成すチャンタン－ラサ地塊，そして北側には古いユーラシアの地塊が分布しており，これら三つの地塊に挟まれたのが松潘－甘孜褶曲帯である（第1図）．揚子江の上流域に位置し，南北に走る横断山脈が収束している部分に相当する．西部にはレッドリバー断層に併走する左横ずれ活断層，Xianshui He断層が分布している．本巡検の目的は，⑴チベット高原東縁を限る竜門山スラスト－ナップ帯と前縁盆地堆積物の観察，⑵松潘－甘孜褶曲帯の古生代と三畳紀の地層の変形と変成岩の観察，⑶Xianshui He断層の断層地形と地震断層露頭の観察であった．なお，本地域の大部分は少数民族が住む地域であり，中にはパンダの自然保護区もあり，外国人旅行者には昨年開放されたばかりの地域も含まれていた．

本巡検の案内者は次の5人であった：成都理工学院の李勇教授，王国芝助教授，四川省地震局の周栄軍氏，メルボルン大学のChristopher J.L. Wilson教授（以下クリス）とその学生Mat Harrowfield．巡検期間は6日間と長く，連日200～300kmを走破し，総走行距離は1,200kmを越えた．その間に4,000m以上の峠を3つ越さなければならず，かなりの強行軍になることは最初から予想された．巡検に先立ち配布された資料には，45か所の露頭ストップが記載されており，毎日朝8時出発，夜8時半～9時半到着と書かれていた．このような大変な巡検にも拘わらず，良く準備されていた．軍隊の輸送トラック部隊による渋滞のため到達できなかった，標高7,556mのコンカ山麓を除いて，全て予定通りに実施された．参加者は8か国からの36名であった．6日間の巡検のハイライトは以下のとおりである．

第1日目：造山帯前縁のスラストとジュラ紀の西四川前縁盆地堆積物および竜門山帯のクリッペ
第2日目：Jiudianpingクリッペと先カンブリア紀のPengguan基盤岩類およびその東西の境界断層
第3日目：松潘－甘孜褶曲帯東縁のペルム紀枕状変玄武岩と石灰岩の横臥褶曲および丹巴変成帯とその周辺の三畳系タービダイトの変形と変成岩
第4日目：揚子地塊基盤の片麻岩と変成したシルル系の間のデタッチメントおよびXianshui He断層帯に沿う温泉，破砕帯，プルアパート盆地，中新世優白色花崗岩
第5日目：Xianshui He断層の断層地形と1955年のM7.5の地震断層露頭および南北に走るDaduhe断層と段丘の変位地形
第6日目：ジュラ紀から始新世にわたる陸成の前縁盆地堆積物，およびこれらを覆う第四紀礫層

松潘－甘孜褶曲帯と竜門山帯の概略については，地質学雑誌口絵に投稿中である．

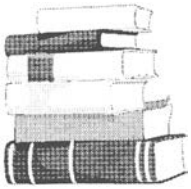
この巡検では，露頭の前で中国人研究者と海外からの研究者が激しく議論することがしばしばあった．ことに活断層の認定の是非やデタッチメントについては，各地で議論がわき起こった．全員が納得することはなかなか無かったが，案内者にとっても参加者にとっても有意義な巡検であった．私にとってよく判らなかった重要な問題は次の3点である．⑴松潘－甘孜褶曲帯には200Ma前後のIndosinian期に貫入した花崗岩が広大な地域に分布しているが，そのメルトはどのようにして形成されたのか？　またヒマラヤ期の中新世花崗岩は，ヒマラヤから遠く離れたこの地帯でも，ハイヒマラヤの花崗岩と同じようにして形成されたのだろうか？ ⑵チベット高原東縁の横ずれ断層群と地震の発震機構は，この地域が東西圧縮場にあることを示す．これはTapponnier氏の主張する，インドの衝突に起因する南北圧縮によるインドシナ・華南地方の側方押し出し（extrusion）モデルでは説明できない．⑶松潘－甘孜帯の厚い海成層は，揚子地塊の大陸縁辺相として理解されるが，その沖合にあったはずの海洋底は現在どこにあるのか？　そしてこの地帯は，テーチス海のどのような地理的位置にあったのか？　これらの質問に対し，この地帯を過去10年間研究してきた案内者のクリスからも納得のいく説明を聞くことはできなかった．彼の研究チームは，巡検後引き続きこの地帯の西方縁辺とチャンタン地塊との境界部の調査に向かった．調査の成果が待ち望まれる．

なお，巡検第1日目には紀元前250年に洪水制御と灌漑用水確保の目的で岷江に建設された都江堰を訪れ，参加者全員がその英知と偉業に脱帽した．2日目にはWolongパンダ自然保護区の繁殖場を訪れ，昨年10月に生まれたばかりの可愛いパンダに目を細めた．3日目には秀峰，四姑娘山（Sigulian Shan, 6250m）を望み，5日目には毛沢東率いる紅軍の遠征の要となった瀘定（Luding）の橋を渡った．高山病や風土病に罹ることを心配して，巡検には医師も随行したが事故は無く，参加者全員が案内者の心遣いともてなしに深く感謝して巡検を終えた．

本ワークショップおよびその前後の巡検は，成都理工学院の王善成（Wang Chengshan）教授を組織委員長としたチームによって組織・運営された．中国が国を挙げて支援し，全体として実に良く組織された学会であった．ワークショップの最後には，参加者全員から惜しみない感謝と賞賛の拍手が送られた．

3年後の2003年に日本でHKTを開催することになったが，果たして今回のような素晴らしい学会にすることができるであろうか？ 協賛基金，マンパワーなどに一抹の不安があることは否めない．地質学会のヒマラヤ地質委員会を中心に，早急に準備委員会を立ち上げねばならない．なお本ワークショップへの参加に際して，九州大学創立80周年記念国際交流基金から旅費を支援していただいた．ここに記して感謝する．

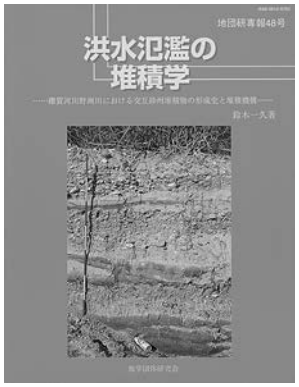
（九州大学大学院比較社会文化研究院
地球変動教室
酒井治孝・藤井理恵）



紹　介

洪水氾濫の堆積学
―礫質河川野洲川における交互砂州堆積物の形成史と堆積機構―

鈴木一久著



〔地学団体研究会，2000年4月刊行，地団研専報48号，69ページ，定価1,800円（本体），ISSN 0912-5760〕

本書は，著者がこの10年間にわたって行った，琵琶湖にそそぐ野洲川で観察される交互砂州における氾濫堆積作用の研究をまとめたものである．一読して，精力的かつ独自の工夫が施された野外調査で得られた，豊富でオリジナルな資料によって，読み応えのあるものになっており，河川堆積物について重要な成果である．調査のために，延べ約300 mにおよぶトレンチを堀って観察が行われているが，その苦労は礫質堆積物を実際にほった経験のない方には，なかなかわからないと思う．しかも，著者の研究環境は決して恵まれていたわけではなく，そのような状況下でもアイデア次第ではおもしろい研究が可能であるという貴重な例でもある．

堆積相解析は，現在では地層を研究する者にとって身につけていなければならない手法である．1970～80年代にかけて海外で出版された堆積相解析の教科書といえる本は，現在でも版を変えて出版されている．どの教科書にも共通していることは，現在の地球上でみられる堆積環境ごとに章を分けて，現世の堆積環境を定義して，堆積相や堆積物の特徴をまとめていることである．堆積相の認定には，現世の堆積物の研究が必要不可欠であることは論を待たない．しかしながら，わが国の堆積相に関する研究を振り返ってみると，現世の堆積環境や堆積物の研究例は非常に少ないのが現状である．ここで取り上げられている河川環境についていえば，自然地理学や地形学の分野で研究成果が積み重ねられているが，地質研究者の立場からみると河川堆積物の成果は十分とは言えない．やはり，地質学研究者自身による調査研究は必要なのである．また，わが国の河川環境を眺めてみると，河床勾配，堆積物の運搬量など多くの点でアメリカ・ヨーロッパなどの安定大陸の河川とは大きな違いがある．このような点から考えても，河川環境のみならず，わが国の堆積環境における堆積相や堆積物をまとめた研究は必要である．

本書の構成は，10年間の調査経過にほぼ沿っており，その内容は次の通りである：第Ⅰ章　野洲川の概略と調査地域の河床地形，第Ⅱ章　野洲川の洪水，第Ⅲ章　洪水氾濫堆積物の層序と堆積形態，第Ⅳ章　粒度組成と内部堆積構造，第Ⅴ章以降は1995年5月12日の洪水で形成された堆積体について，その分布・層厚変化・古流向から氾濫堆積作用をまとめ（第Ⅴ章），各トレンチ面にみられる堆積構造を記載し（第Ⅵ章），洪水氾濫堆積物の形成機構の検討を行い（第Ⅶ章），最後にまとめと課題がある．著者は宇治丘陵南部に分布する大阪層群城陽礫層を調査中に自然堤防帯堆積物にみられる逆級化構造を発見したことをきっかけに，現在進行中の堆積過程を理解する必要性を痛感したと述べている．

野洲川は鈴鹿山地に源を発し琵琶湖にそそぐ，延長60 km余りの小～中規模河川である．野洲川は近江平野でファンデルタを形成し，調査地点はその扇央部に当たっている．そのため，河床形態の変動が顕著であり，1947年の米軍空中写真以降のその様子がまとめられている．調査対象になった堆積物は，野洲川右岸の比高1.5-2.5 mの交互砂州である．交互砂州の堆積物は，岩相によって下部，中部，上部層に3分される：下部層は粗粒砂～細礫を基質とする中～大礫からなり，透かし礫層もみられる，中部層は淘汰の悪いシルトを基質とする中～大礫とシルトからなり，まれに砂層をはさむ，上部層は10枚の逆級化構造をなす砂および砂礫層と挟在する薄い泥層からなる．交互砂州の主体をなし，逆級化構造の発達する上部層は調査地域全体にわたって追跡されており，等層厚線図をもとに平面形態が押さえられている．また，上部層A～J層の逆級化構造の形成年代が堆積物中の缶やプラスチック類の製造年月日をもとに，交互砂州で堆積作用をおこす洪水の発生日と関連させて形成年代を特定した．

次に，洪水流によって形成される特徴的な堆積構造として逆級化構造を記載している．逆級化構造はこの地域で普遍的にみられ，まれに二重逆級化構造が認められることを報告している．その原因として，氾濫流と供給量の脈動を指摘した．さらに，堆積物の水平分級作用，氾濫流の向きの変化，砂礫堆の前進でも生じる可能性を述べている．評者も那珂川のポイント・バーで二重逆級化構造を観察しており，ここでは洪水前の微地形による影響のもとに堆積物の水平分級作用が関わっているようである．

次に，逆級化構造を含む洪水堆積物がどのように形成されたかという問題が生じる．そこで，1995年5月12日の洪水を観察して，氾濫流の状況や堆積物体の微地形と表面粒度，さらに古流向を検討し，堆積体の分布，層厚を求めている．洪水氾濫堆積物の堆積過程を復元するために，8本のトレンチによる連続した面で堆積構造を観察して，9ページにわたってスケッチが示されており，本論文の最も重要な部分である．その中で，認定した堆積ユニットをもとに，堆積過程を検討し，その要因として原地形の高度の影響がまず考えられ，洪水位の変化およびそれに伴う営力や流向の変化，堆積物の供給量や粒度の変化などが複雑にからんでいると予想され，図解している．この堆積過程は，5月12日9時から22時までにおこっており，時刻による変化がまとめられている．

評者も現世の河川環境に興味をもって調査中で，本書の成果に参考になることが多い．本書の出版を契機に多くの地質研究者が現世の堆積環境，堆積物に眼を向けることを期待しています．

入手方法：地学団体研究会にて販売，頒価1,800円（送料別）．連絡方法はFax：03-3983-7525，またはe-mail：chidanken@tokyo.email.ne.jp　今年の島根大会の地質学会書籍コーナーでも販売されます．

（牧野泰彦）

ご案内

本会以外の学会および研究会・委員会よりの催し物のご案内を掲載します．

「青少年のための科学の祭典2000全国大会」のご案内

標記全国大会が次のように開催され，本学会もその後援団体の一つとして協力しています．

全体テーマ：想像力は，光より速い
期　間：2000年7月28日（金）～8月1日
会　場：科学技術館（東京都千代田区北の丸公園）
主催：「青少年のための科学の祭典」全国大会実行委員会，科学技術庁，（財）日本科学技術振興財団・科学技術館
参加対象：小・中・高生，学校理科教員，学校教員一般，その他一般
参加費：無料

昨年に引き続き，地質学分野においても会員・非会員の方々による実験・演示が行われることになっていますので，全国大会事務局の了承と資料提供を得て，下記にご紹介します（それぞれ，ｶｯｺ内の前半は7月28・29日，後半は7月30～8月1日の実験・演示を示します）．

☆マグマを作って，石をとかそう（後半）
加藤識泰（北海道芦別総合技術高等学校）
電子レンジを使って炭素のマグマを作り，その中に鉱石を入れ，還元して金属の単体を得ます．

☆太古の地球への招待　化石の進化を探りましょう（後半）
神戸信和（日本大学文理学部）
太古の地球の地層から発見される三葉虫・アンモナイト・二枚貝などの化石のレプリカをつくる体験とこれらの化石の進化について学習します．

☆石灰岩をピカピカにみがこう（後半）
小寺隆司（京都市立松原中学校）
ホームセンターなどの身近な場所で簡単に入手できる材料を使って石灰岩の表面を鏡面に仕上げます．これを用いて石灰岩に含まれている化石を観察します．

☆プラスチック板でスンプ法による化石のプレパラートを作ろう（前半）
岩田恒郎
石灰岩の表面に浮き上がっているフズリナやサンゴの模様を接着剤を用いてプラスチック板に写します．

☆再現！地震による地盤の液状化（後半）
関根純平（神奈川大学附属中・高等学校）
地震による地盤の液状化により，重いものは沈み，軽いものは地表に浮かび上がることを説明します．液状化予想マップ等を展示して，地盤と液状化の関係についても説明します．

☆川が平野をうめ立てた（川と平野）（前半）
阿部国広（川崎市立西有馬小学校）
平野はどのように生まれたのかを知ることができる実験です．礫・砂・シルト・粘土を混ぜ合わせた模型の山地に雨を降らせることで，川が山地を削り，台地・低地を形成していく様子を観察することができます．

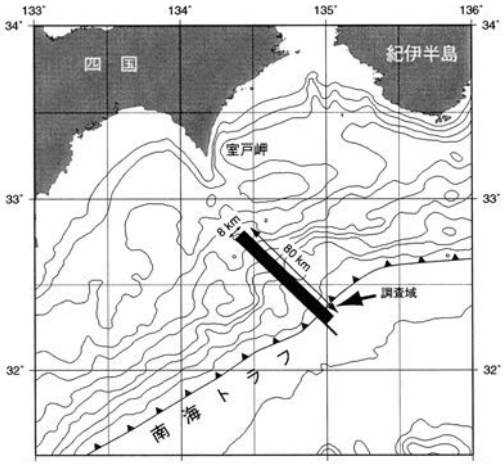
☆ペットボトルで地震の再現（前半）
兼子尚知（通商産業省工業技術院地質調査所）
ペットボトルを利用して，粒子の堆積・分級の観察と，地震時に発生する地盤（地層）の液状化現象の再現を行います．

「海溝型巨大地震発生帯へのバーチャル探検」のお知らせ

1999年夏，科学技術庁は海溝型巨大地震発生帯の三次元地質構造を明らかにするため，科学技術振興調整費「南海トラフにおける海溝型巨大地震災害軽減のための地震発生機構のモデル化・観測システムの高度化に関する総合研究」（平成8年度～12年度）により，四国沖南海トラフで三次元地震波探査を行いました．この海域は海溝型巨大地震が繰り返し発生してきた所で，最も最近の例では，1946年に南海地震が発生し，1,300人以上の犠牲者をだしています．

この研究成果の公表，普及の一端として，海溝型巨大地震を発生させてきた地下へのバーチャル探検を企画いたしました．三次元地震波探査データから明らかになった，巨大地震発生帯を仮想的に再現し，その空間にあたかも入り込むようにして，地震発生帯の地下地質構造を体験することが可能です．海底下約10kmのバーチャル地下探検に参加して，巨大地震発生帯を見てみませんか．

日　時：2000年8月31日（木），9月1日（金）：時間は参加者へ別途ご連絡いたします．
場　所：日本SGI株式会社リアリティーセンター（恵比寿ガーデンプレイスタワー）
主催：科学技術庁，通商産業省工業技術院地質調査所
協力：日本SGI株式会社，Paradigm Geophysical社
参加申し込み：参加費無料，どなたでもご参加いただけます．会場の都合上，事前登録をお願いいたします．その際に参加者氏名，連絡先，参加者人数，参加希望日などを連絡願います．
申込先：工業技術院地質調査所　海洋地質部
倉本真一　Fax : 0298-61-3767
e-mail : kuramoto@gsj.go.jp
締め切り：8月23日（水）
問い合わせ先：科学技術庁研究開発局地震調査研究課　岡谷隆基　電話 03-3503-8162



四国沖南海トラフで行った三次元地震波探査の調査範囲を示します．8km×80kmの範囲の地下地質構造に入り込み，巨大地震発生地帯へバーチャル探検を行います．

IGCP450「西ゴンドワナのBase Metal堆積性鉱床」の発足と，日本人科学者にご参加の呼びかけ

今年2月のIGCP科学委員会で，標記のIGCPプロジェクトが新しく発足しました．プロジェクト提案者はカルガリー大学（カナダ）のS.S. Iyerで，共同リーダーは，同氏のほかに，A.F. Kamona（ナミビア），A. Misi（ブラジル），J.L.H. Cailteux（ベルギー）です．本プロジェクトは，西ゴンドワナの大西洋両岸地域における有用鉱物鉱床分布への注意喚起を目的としています（以下）．

(1)鉱床に関するデーターベースの作成，(2)原生代形成鉱床の鉱化作用に関する記載と対比，とくに地質学的，鉱物学的，地球化学的側面に注目，(3)鉱化作用マップの作成，(4)アフリカと南米の原生代堆積性Cu-Pb-Zn鉱床に関する理解と，その鉱化作用史モデルに関する理解への貢献，(5)大学院生に対する，南米，アフリカの各地，あるいは両地域のBase Metal鉱床に関する対比研究の機会の提供．

なお，同プロジェクトは今年8月にブラジルで行われる万国地質学会期間に第一回ビジネスミーティングを予定しています．この時期は仮に8月15日午後と連絡がありました．ご関心の方はご自由にご参加下さい．

S.S. Iyerは日本でのアクティブな研究グループの発足を期待しています．御関心の方は，吉田あるいはS.S. Iyer（下記）にご連絡下さい．吉田はIGCP-368との関係でIyer博士の依頼を受けたため，暫定的に日本の窓口を引き受けましたが，なるべく早く適当な方に代わっていただく予定です．

吉田　勝
〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138
大阪市立大学理学部
電話 & Fax : 06-6605-3182
E-mail : myoshida@sci.osaka-cu.ac.jp

S. S. Iyer
Stable Isotopes Lab., Dept. of Physics & Astronomy
University of Calgary
Calgary, AB T2N 2N4
Tel : 001-403-220-5241/220-6813
Fax : 403-289-3331
E-mail : iyer@ucalgary.ca
（大阪市立大学　吉田　勝）

各賞・研究助成

日本地質学会に寄せられた候補者の推薦依頼をご案内いたします．推薦ご希望の方は締切日半月前までに，執行委員会までお申し込み下さい．

平成13年度東京大学海洋研究所研究船白鳳丸共同利用研究公募

研究船白鳳丸（3,991総トン）による長期計画に基づく特定海域の研究航海を行います．（研究航海概要参照）

応募資格：国・公・私立大学および国・公立研究機関の研究者並びにこれに準じる者で，海洋の基礎的研究を目的とするものとします．

申込期限：平成12年7月31日（月）

応募を希望される方は，公募要領を参照ください．公募要領および各申込書類は＜http : //www.ori.u-tokyo.ac.jp＞に掲載されています．

公募

教官公募等の求人のニュース原稿につきましては，採用結果をお知らせいただけますようお願い致します．

東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻地球生命圏科学講座教官の公募

職種・人員：教授または助教授　1名
所属講座：地球生命圏科学講座
専攻分野：生命圏物質科学分野
応募資格：学位（博士）を有し，大学院博士前期・後期課程での研究指導を担当できる方
着任時期：決定後なるべく早い時期
提出書類
⑴ 履歴書
⑵ 業績目録（査読の有無を記した原著論文，著書，総説，報告書に分けて記載すること）
⑶ これまでの研究経過（2,000字程度）
⑷ 主要論文5編の別刷またはコピー
⑸ 自薦の場合は，今後の研究・教育計画・抱負（2,000字程度）
⑹ 応募者について意見を伺える方2名の氏名と連絡先
公募締め切り：平成12年7月31日（月）必着
封筒の表に「地球生命圏科学講座教官応募」と朱書きし，簡易書留にて郵送すること
書類の提出先および問い合わせ先
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻
専攻長　松浦充宏　宛
電話：03-5841-4318（ダイヤル・イン）
電子メール：matsuura@eps.s.u-tokyo.ac.jp
付記：東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻の概要および生命圏物質科学分野の詳細についてはホームページ（http ://www.eps.s.u-tokyo.ac.jp）をご覧下さい．

姫路工業大学理学部教員の公募

職　名：教授　1名
所　属：理学部　生命科学科　地球科学講座（助教授　芳賀信彦，助手　萩谷健治が在職）
専門分野：地球や惑星を構成する物質の構造や進化についての研究に造詣と意欲を有し，学部，大学院における地球科学関連の講義，実験および研究指導を担当していただける方．なお，地球科学関連の講座としては，地球テクトニクス講座（松田高明教授，森永速男助教授，後藤　篤助手）があります．
着任時期：平成13年4月1日
提出書類：○履歴書　○業績リスト　○主要論文10編の要約（各200字程度）と別刷各1部　○これまでの研究の概要（2,000字程度）と今後の研究・教育に対する抱負（2,000字程度）　○推薦書または本人について問い合わせのできる方2名のお名前と連絡先
公募締切：平成12年9月14日（木）（必着）
書類送付先：678-1297 兵庫県赤穂郡上郡町光都3-2-1
姫路工業大学理学部長　平田　肇
電話 0791-58-0101（理学部　総務課）
問い合わせ先：678-1297 兵庫県赤穂郡上郡町光都3-2-1
姫路工業大学理学部　生命科学科
安岡則武　電話 0791-58-0179
その他：封筒に「地球科学講座　教授応募書類」と朱書し，簡易書留便で送付のこと．
なお当理学部のホームページのURLはつぎの通りです．http ://www.sci.himeji-tech.ac.jp/

東北大学大学院理学研究科地学専攻（地球物質科学科）の教官公募について

公募職種：教授　1名
公募分野：資源環境地球化学分野
着任予定：決定後，可能な限り早い時期
提出書類：
1） 履歴書（市販用紙使用，署名捺印）
2） 研究業績目録（審査付き論文，著書，その他諸報告に区分）
3） 主要な原著論文別刷りまたは著書10編（コピー可）およびそれらの説明（各論文・著書につき400字程度）
4） 教育研究活動の概要（書式自由，2,000字程度）
5） 教育研究活動の記録（内外の学会活動，受賞歴，各種研究費受領歴，非常勤講師歴，公的機関の委員歴，その他教育研究活動として参考になる事項）
6） 今後の教育・研究の計画・抱負（2,000字程度）
応募締め切り：2000年10月31日（火）必着
封筒の表に「教官応募書類在中」朱書し，簡易書留にて郵送すること．
書類の送付および問い合わせ先：
〒980-8578 仙台市青葉区荒巻字青葉
東北大学大学院理学研究科地学専攻
大谷栄治
電話 022-217-6662（ダイヤルイン）
Fax 022-217-6675；電子メールohtani@mail.cc.tohoku.ac.jp
教室のホームページ：http ://www.ganko.tohoku.ac.jp

報告

本会委員会以外の研究会・委員会等よりのお知らせを掲載します.

地質研連（第17期・第8回）報告

平成12年3月3日（金）13：30～17：00
日本学術会議第7部会議室
出　席：斎藤，青木，岩松，新妻，西脇，八尾，徳岡，天野，佐倉，広井，小玉，木村
欠　席：足立，小川，高島

1）日本学術会議連合部会，第4部会，その他の報告

1.　連合部会

⑴ インターアカデミーパネル2000年会議に係るステートメント（案）などについて（審議依頼）

日本学術会議運営審議会付置「インターアカデミーパネル委員会」の吉川弘之委員長から標記について審議依頼があり，その内容について大橋委員（第5部）から説明がなされた．1995年に世界のアカデミーのフォーラムとして設立，82か国の科学アカデミーが加盟，事務局は全米科学アカデミーに設置．目的は国際問題について科学的側面から勧告や情報を政府・国際機関に提供と世界的な学術協力を通じて，各国が直面する重要な課題解決に貢献するためのアカデミーの能力を育成．

インターアカデミーパネル2000年会議について

日　時：平成12年5月15日（月）～18日（木）
場　所：東京（東京国際フォーラム），主催：日本学術会議
参加機関：世界82の科学アカデミーなど，参加予定者数：国外350人，国内100人，計450人
会議内容：ア）21世紀において人類が実現しなければならない持続的発展への移行に向けて，人口や食料，水，などに関する問題解決のために科学は何をなすべきか，また，なし得るかを討議し，今後人類が進むべき道を提言するための宣言を採択．イ）アマルティヤ・セン教授（厚生経済学への貢献により1998年ノーベル経済学賞受賞）の基調講演など，著名な科学者が多数参加予定．第4部からは大滝，森脇会員が出席，他に2名の傍聴希望者が推薦できる．

⑵ 第8回アジア学術会議実施要領（案）について（検討依頼）

標記について柏崎副会長から内容の説明がなされた．

開催の趣旨：ア）アジアの科学者の意見をIPA2000年会議に反映させるため，IPA2000年会議に向けての提言をアジア会議が作成し，IPA2000年会議において意見の発表を行う，イ）2001年5月にタイ国で開催予定の第1回Science Council of Asia（SCA）に向けた準備に関する検討を行うこと．
日　時：平成12年5月13日（土）～19日（金）
場　所：ホテルニューオータニ及び東京国際フォーラム，参加国及び参加者：アジア10か国の代表科学者各2名，計20名．

⑶ 安全に関する緊急特別委員会の審議状況について（検討依頼）

久米委員長から，現代における安全の概念を明確化するとともに，それを実現するために現実的に行われ，また，設置されている法律，組織，技術などについて調査考察し，不備を指摘し，改善点を提案することを目的として昨年10月に設置された本委員会が取りまとめた「安全学の構築に向けて」（案）が説明された．なお，後日（3月23日），シンポジウムを行う．

内容は，考察の対象，どうして事故になるのか―事故の様相の概観，安全のマネージメント，技術者の倫理，規制のあり方，社会の安全認識，教育の問題，安全活動の基本的枠組みの提案，安全学の構築に向けて，むすびなどとなっている．

⑷ 教育・環境問題特別委員会の審議状況について

和田委員長から「人間としての自覚」に基づく「教育」と「環境」両問題の統合的解決を目指して―新しい価値観に支えられた明るい社会の基盤形成―について，会員と委員からの意見を入れた修正案について説明があった．最終的に「勧告」とするか「声明」とするかは検討中である．

⑸ 女性科学者の環境改善の推進特別委員会の審議状況について

尾本委員長から本委員会の審議経過について説明があり，内容を取りまとめ，1つは「要望」（案），他の1つは「声明」（案）とし，前者は女性科学者の環境改善に関して政府・大学などに対して行うもの，後者は日本学術会議の女性会員比率を高めるための内部努力に関するものである．

⑹ 化学研究連絡委員会の審議状況について

大滝会員（第4部）からアジア化学・科学技術推進機構の設立について－人材育成と基礎化学の振興－（案）（要望）について説明があった．アジア諸国の発展に貢献するため，その最初の試みとして「アジア化学・科学技術推進機構」（仮称「アジア化学推進機構」）の設立を提案するものである．

2.　第4部会

審議事項

⑴ 平成12年度代表派遣会議及び代表派遣候補者の推薦について

平成12年度について地質科学・地理学グループからは第1区分として，国際地質科学連合第11回総会・評議会ならびに第31回万国地質会議に斎藤常正第4部会員，国際地球化学・宇宙化学協会2000年総会に矢内桂三地球化学・宇宙化学研連委員，第29回国際地理学会議総会に榧根　勇第4部会員，第2区分として，国際地図学協会理事会に森田喬地図学研連委員，第3区分として，国際地質科学連合第11回総会ならびに第31回万国地質会議に地質学研連西脇二一地質学研連委員，（補）松枝大治鉱物学研連委員が推薦された．

⑵ 科学研究費補助金の分科細目別対応研究連絡委員会一覧表の修正について

最終的な科研費の分科細目別対応研連一覧表（別表）が承認された．分科「地球科学」では地球物理学の3細目に電波科学研連が加えられ，地質科学では細目「地質学」に地質研連と第四紀研連，「層位・古生物学」に地質学，古生物学と第四紀研連が加えられた．

⑶ 平成14年度開催国際会議の共同主催申請について（審議依頼）

平成14年度共同主催国際会議について12件（内第4部関連11件）の申請があり，8件採択の予定，なお，地質科学を含む地球科学関係はない．各関係部において，優先順位を付す国際会議の件数は6件までとし，第1～6位までの順位を付すこととなった．第4部は各会員が通信投票をすることとなった．

⑷ 国際対応委員会の改組について（申し合せ）の一部改正について（案）

名称の変更
旧　「国際対応委員会の改組について（申し合せ）」
新　「国際対応に係る委員会について（申し合せ）」

旧　IGBP・HDP研連（仮称）
新　地球環境研連

旧　STEP専委，DELP専委
新　STPP専委，ILP専委

⑸ 対外報告などについて
・化学研連「アジア化学推進機構の設立について（要望）」（案）
・地理学研連「環境問題についての地理学からの提言」（案）
・第4部会「理学（基礎科学）研究の推進について」（案）
・核科学総合研連「原子力の利用に伴う安全確保の体制について」（案）

それぞれの対外報告が審議承認された．

⑹ 平成14年度科学研究費補助金に係る「時限付き分科細目の設定」について

標記について第4常置委員会から検討するように依頼があった．第4部では各研連において検討し，設置の希望があれば平成12年6月16日（金）までに回答することとした．

⑺ 第4部夏部会について

平成12年7月13，14日（木・金）高知工業大学において開催される予定．

2）科学研究費地質学関連細目の審査委員推薦について

1.　科学研究費補助金審査委員の推薦問題

去る1月6日，第4常置委員会と研連委員会の合同会議が開催され，平成13年度からの科研費審査委員の推薦方式と日程について要請があった．その要点は以下のようなものである．

⑴ 審査委員の推薦はすべて関係研連（窓口研連）が取りまとめて行う．

⑵ 推薦の期限が早くなり，4月末に関係学協会などから窓口研連へ推薦者名簿を回収，5月中旬，窓口研連から第4常置委員会に候補者名簿を送る．

⑶ この際，窓口研連だけでなく，対応研連に必ず相談する．

このとき問題になったのは「対応研連」であった．第4部会での議論では窓口研連だけを表に出すと決めたが，対応を希望した研連すべてが検討されないままリストされ提出されていた．対応研連のリストには加筆が可能（削除は不可）である，とのことだったので2月17日の第4部会において，地質科学関係について修正し，下記のようにした．すなわち，

細目地質学：地質科学総合（窓口），地質学，第四紀，極地

細目層位古生物学：地質科学総合（窓口），地質学，古生物学，第四紀

細目岩石・鉱物・鉱床学：地質科学総合（窓口），鉱物学，極地，結晶学

細目地球化学：地球化学・宇宙化学（窓口），鉱物学

なお，当初，細目地球化学で鉱物学研連の名を削除することを考えたが，削除は不可とのことで残ることとなった．

極地研連と結晶学研連については，8月の段階で委員の推薦をお願いする予定はないことを伝えてあったが，上記のような経緯で対応研連として名が残ったため，改めて1月中旬に鎮西から説明し了承を得た．

2.　科研費委員の推薦が早まったため，4月中旬までに委員を推薦するよう関連各学会に要請した．だが平成12年度の委員の名簿が非公開で留任委員が不明なため，推薦すべき委員候補数は暫定的で，○名＋αの形で依頼した．各学会間の調整は4月下旬に実施する予定である．

3.　地質科学関連学協会の連合体の創立集会について

本研連が中心になって設立を計画中の「地質科学関連学協会の連合体」について，その創立集会を平成12年3月27日（月）午後に開催することとした．これまでに参加を正式に決定したと通知があったのは13学会で，これまで集会に参加しながらまだ回答がないのは3学会である．

審議事項

1.　科研費時限分科細目について

次年度以降の提案がもしあれば，6月の研連にて改めて議論することとした．

2.　IGBP委員の復活について

地球環境研連（IGBP）に地質関係者を入れることを条件に第4部会で認めた経緯があるにもかかわらず，現在入っていない．適任者を早急に決めて，18期に申し送ることとした．6月，地質学会評議員会へ委員1人の推薦をお願いすることとした．

3.　科研費審査委員の決め方について

報告にあるように，委員は研連で決めることとなるが，平成14年度以降の関連研連，窓口研連が決まってはいない．次期学術会議会員が決まった後，議論されることとなる．

4. ブラジルで開催されるIGC日本代表8名の選定については，斎藤学術会議会員に一任することとした．

3）「技術者教育の国際相互承認制度」について

岩松委員よりJABEE（日本技術者教育認定機構）が平成11年11月19日に発足したことについて説明があった．研連が中心となって関連学協会との連絡をとっていくこととなった．

4）その他

小玉委員より，独立行政法人化に伴う，地質調査所の改組について報告があった．

（木村　学）

日本学術会議鉱物学研究連絡委員会鉱床学専門委員会（第17期，第8回）議事録

日　時：平成12年3月6日（月）15：30–17：00

場　所：日本学術会議6階第7部会会議室

出席者：石渡　明（書記）・上野宏共・島田允尭・千葉　仁・根建心具・松枝大治（委員長代行）・渡辺　洵．

欠席者：島崎英彦（委員長）・溝田忠人（欠席者は書面にてコメント）

（五十音順）

本会議に先立って，13：30～15：30に鉱床学専門委員会との合同会議が行われた．これについての報告は省略する．

⑴ 諸報告

直前の合同会議で報告されたので，省略．

⑵ 対外報告の配布先について

今期の鉱床学専門委員会で作成し，既に刷り上っている対外報告をどこに配布すべきか議論した結果，以下のような候補が挙がった．

ア．日本学術会議の関連研究連絡委員会の代表

イ．主要な政党の事務所，主な国会議員の事務所．

ウ．資源素材学会など関連諸学会の事務局．

エ．大学の理工系学部の学部長

オ．文部省・科学技術庁・資源エネルギー庁などの役所

カ．経団連・銀行協会など

一部の委員から，今回の対外報告がエネルギー資源に全く論及していないこと，「役に立つ学問」を強調していて純粋科学としての重要性を軽視していることなどの反省が述べられた．

⑶ 第17期鉱床学専門委員会の活動内容について

ア．対外報告を作成し，既に印刷した．現在，上で諮ったように配布準備中である．

イ．鉱床学関連研究者・院生名簿を作成すべきか否か

これについては，従来型の名簿を作っても，既に時流に合わず，あまり利用価値がないという否定的意見が多かった．全国の鉱床学関連の教室にリンクしたホームページを作成し，資源地質学会や岩鉱学会のウェブサイトに載せたらどうかという案が出て，松枝委員長代行がホームページ掲載について学会に打診することになった．

ウ．日本学術会議の研究連絡委員会の統廃合

第18期に行われる統廃合で，鉱床学専門委員会やそれより小規模の専門委員会が，廃止のターゲットになる可能性が指摘された．これに関連する資料として，松枝委員長代行から，日本鉱業協会・資源産業技術戦略策定委員会による「資源産業技術戦略」という大きな報告書の一部のコピーが配布された．これは30年先の資源確保を睨む具体的な戦略であり，鉱床分野の「科学技術基本法」というべきもので，これをよく勉強して，鉱床学分野を活発化していく必要が強調された．

⑷ その他

ア．科研費問題（鉱床分野の科研費申請件数を増やそう）

イ．大学の独立行政法人化に向けての対応（現状報告と意見交換）

ウ．鉱床学専門委員会自体の存在意義（踏み込んで議論すべきという提案）

以上．

（石渡　明）

受信箱

・構造地質研究会：構造研会長が狩野謙一氏から在田一則氏（北大）に，事務局の行事・庶務が高木秀雄氏から久田健一郎氏（筑波大）に，会員・会計・書籍が金川久一氏から安間　了氏（筑波大）に代わった．

2000年の会費払込について

2000年1月～12月の会費額は下記のとおりです．未納の方には請求書を送付しました．早急にご送金をお願いいたします．

正 会 員　12,000円（アイランドアーク購読料　8,000円）
院生会員　8,000円（　　〃　　6,000円）
学生会員　5,000円（　　〃　　6,000円）
＊正会員会費のみ今年から10,000円→12,000円に変更されました．

1.　金融機関自動引き落しのお申し込みをいただいた方へ

1月20日以降5月20日頃までにお申し込みいただき，2000年会費が未入金の方を対象に，次回は6月23日（金）に引き落としの予定です．請求書ならびに引き落し通知の発行は省略させていただきますのでご了承ください．通帳には金額と共に「チシツカイヒ」あるいは「フリカエ」，「MFS」などと表示されていますのでご確認ください．

2.　自動引き落し新規の申込を受け付けています．登録口座変更の場合も改めて申込書をお送り下さい．

学会としては自動引き落しによる払込みをより多くの会員に積極的に採用していただきたく，ご理解とご協力をお願いいたします．

次年2001年から自動引き落しをご利用いただく場合は11月10日頃までに申込書をお送り下さい．申込書はニュース誌4月号に掲載されています．

（日本地質学会会計委員会）

2000年版会員名簿作成についてのお願い

本年11月末日発行の予定で，会員名簿作成の準備をいたします．下記の変更・訂正用のフォーマットに記入の上Fax（E-mailも可）でご返送下さい．前回名簿にとじ込みのハガキもご利用下さい．基本的な登録項目（氏名＝フリガナ・アルファベット表記，出身校＝卒・修了年，専門分野，勤務先＝住所・電話・Fax，自宅住所＝・電話・Fax，E-mail address）についての確認と，修正・変更をお願いいたします．なお，一般会員の名簿掲載項目は，前回同様①氏名，フリガナ，②出身校，卒・修了年，③勤務（所属）先名，電話，FAX，④連絡先住所（現在会誌等を受け取っている所），電話番号，⑤E-mail addressの予定です．名簿はデータの一括出力作業により作成しますので，ご自分の名簿掲載項目について（氏名以外の項目について）とくに掲載不都合のある場合にはその旨お書き添え下さい．名簿原稿は8月末日締めで作成予定ですので，なるべく早めにご連絡下さるようお願いいたします．

（日本地質学会会員委員会）

Fax. no.　03-5823-1156　　E-mail address　geosocjp@ra2.so-net.ne.jp

会員番号	会員名簿訂正・変更カード　（　年　月　日届）				
アルファベット表記		生年月日	年　月　日		
氏　名		専門			
出身校	学校　年卒・在学 大学　年卒・在学 大学　修士課程　年修・在学 大学　博士課程　年修・在学 大学　研究生・聴講生・その他（　）				
自宅住所	□□□－□□□□（TEL　－　－　，Fax　－　－　）				
所属先住所および名称（社名・部課名まで）	□□□－□□□□（TEL　－　－　，Fax　－　－　） 代表・ダイヤルイン				
E-mail Address					

評議員の抱負

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

廣野哲朗

今年度の院生評議員としての抱負を，自己紹介も交えながら簡単に述べたいと思います．私は現在，東工大に所属するまで，なぜか大学を4つも変えています．もともと学部は筑波大の地球科学科の構造地質の研究室で，卒論では房総半島の新第三系の変形構造解析やテクトニクスを研究しました．といっても学部4年生当時は，全くやる気のない学生で指導教官の小川勇二郎先生にいつもご迷惑をかけていました．そして，何となく就職するのもいやだったし，何となく筑波大学の大学院入学試験をうけました．当然，モチベーションも薄く，全然，勉強もしなかったので，当時の審査教官の方に「お前みたいな馬鹿なやつは大学院にくるな」と罵倒され，みごと不合格でした．さすがにそこまで罵倒されると非常に悔しく，平行して卒論を何となく進めるうちにだんだんと地球科学への興味が増してきました．フィールドは何度行っても楽しいですし，行くたびに新しい発見がありました．卒論として一区切りつけたときには，すでにEarth Scienceの虜になりました．卒論が終わって初めて研究の面白さを知ったと思います．修士課程では東大，地質学専攻の多田・芦研で，陸上の野外調査および海域での地震波断面やサイドスキャンソナーのデータなどを使って東海地方の新第三紀以降のテクトニクスを考察しました．自分の出身が浜松ということもあって，幼少から常に頭の中にある東海大地震に少しは関係した研究にやりがいを感じました．そして，大学院博士課程に進学するかどうか願書締め切りぎりぎりまで迷い，北大・地球惑星科学専攻の中嶋悟さんの研究室に進学しました（北大に進学した本当の理由は実は札幌にいる彼女と結婚するためです）．現在の博士課程では，地質学の長所と短所を自分なりに見つめ直し，中嶋さんや北大のいろんな研究室の院生となんやかんや話しながら，地質媒体における物質移動特性をきちんと評価しよう，その評価方法も開発していこうということで進めています．しかし，博士課程1年次の終わりに指導教官，中嶋さんの東工大への移動が決まり（F1レーサーのように大学を次々と転戦している），私も一緒に東工大に移ることになりました（新婚早々，単身赴任に）．現在は，去年の春に参加した国際深海掘削計画第185次航海で採取した海洋プレート層序の各メンバーの試料での透水・拡散係数の定量的評価やX線CT装置を用いた物質移動その場観測装置の開発などをしています．

ちょっと長い自己紹介でしたが，このようにいろいろあって大学を4つも遍歴することになった訳です．さすがに1，2年おきの引っ越しは面倒ですが，いろいろな大学を知ることができて結果的に非常に有意義でした．個々の大学の感想をここで述べることは憚られるのでやめますが，大学によって全然，雰囲気が違うというのは確かだと思います．特に院生の元気度でしょうか．セミナーで教官を意識して自由に発言できないとか，研究室間での交流があまりに少なすぎるといった昔ながらの封建的な雰囲気を一部で感じることもありました．そこで，今回，2年間任期の院生評議員の間に，院生主催の勉強会を企画しようと考えています．勉強会のテーマは個人的な興味から，「Physical PropertyとDownhole Logging」ですが，その他にも古環境や構造地質，堆積学などでも企画したいと考えています．勉強会の趣旨はODP JapanやJ-Paleoといった海洋地質関係のMLですでに流れていますが，研究室や教室，大学の枠を越えた院生・PDの勉強会の場を作り，自分達の卒論・修論・博論の発表やPP，Loggingの教科書の輪講などを通して，interactiveな議論をし，飲み会も交えて，次のサイエンスを話し合っていこうというものです．特に，院生の発表ではまとまった話よりもむしろプリミティブで「こんな事を考えているんだけど，どうしたらいいか」といったことをみんなで議論できたほうが望ましいと考えています．やはり若手が何でも自由に発言できる場が重要です．そして，お互いのもつオリジナルな発想をフランクにぶつけ合って，そこから新しいものを生み出せればと思います．また，勉強会の場所は参加する人に応じて持ち回りがいいかと考えています．そのメリットとして，研究・実験施設の紹介もついでにできるということがあります．どこの機関にどういった装置があって，どんなことを開発しようとしているのかということをinteractiveに紹介しあって，どんどん共同でやっていければと思います．勉強会後には毎回，飲み会を企画しています．院生・PDや若手のスタッフで，今後のサイエンスを見据えて，なんのためにどんなデータが必要で，そのためにはどんなアプローチ（装置の開発を含む）が必要なのかや，人類や科学において何をすべきなのか，何が求められているのか，また自分は本当は何がしたいのか，といったこともお酒を飲みながら気軽に話し合えたらと思います．すでに第1回は4/14に東工大で行い，約15名の参加者で盛り上がりました．こういった勉強会を全国各地の大学でも行って，院生の元気度アップにつながればと思います．

研究室紹介　No. 11

東京工業大学・地球惑星科学 中嶋研究室の紹介

最後に私が現在，所属する東工大・地球惑星科学・中嶋研の紹介をします．今年度の中嶋研のメンバーはPD1人，博士課程D3が3人，修士課程M2が1人，M1が1人の計7人です．中嶋研の共通するテーマをあげるのは難しく，あえてまとめるのであれば，1．石の色をはかる（地球化学分光法），2．地球の中のものの動きを探る（物質移動学，化学反応速度論，岩石−水相互作用），3．有機物と無機物の反応を調べる（有機−無機相互作用）でしょう．PDの高橋共馬さんはいわゆる古海洋学をD論までやってきて，現在はそもそも堆積物に保存されている化石の種組成が生体群集に対比できるのかといった根本的な疑問を抱き，溶解その場観測などを進めようとしています．D3では，私以外に，東北大からの委託学生の吉田崇宏くんが「生物地球化学サイクルにおける鉱物界面の役割，鉱物−有機配位子反応その場観測」を，金属鉱業事業団からの大学院社会人枠の矢島太郎さんが「含金石英脈中の水の分布と金鉱床探査新手法」を研究しています．修士課程では藤原真樹さんが「腐植物質および重金属錯体の熱的安定性」を，塩田　大くんが「生命の発生・進化に関与した鉱物表面での有機分子の化学進化実験」を研究しています．

各自のテーマは非常に多岐にわたりますが，学生にとって中嶋さんは，各自が興味をもつ自然現象の物理化学的な機構とその中の本質的な素過程の解明への共同研究者（お手伝い？）といった存在です．研究室に共通している雰囲気としては，「出来合いの装置を使ってデータをたくさん出し，曖昧な部分を適当に丸め込んでモデルを立てるような従来からの研究スタイルではなく，自分の本当にしたいことや自分の研究の意義，自分自身の哲学や人生観を考えながら，そこで興味を持ったことに対し，自然にあくまでも忠実に，根本に戻りながら探求していこう．研究とは絶えず失敗し時間がかかるものだから，博士課程3年間や修士課程2年間できれいにまとめるよりもむしろプリミティブだが将来を予感させるような研究をし

よう．子供の頃の純心に戻って，自分の手を動かしながら科学を楽しもう」です．そのため，新しいことへのチャレンジがいつも加速される環境であると思います．中嶋研のセミナー（実験地球物理化学セミナー）は毎週，木曜日の午後4時半から行っています．誰でもウェルカムですので，興味のある方はいつでも遊びに来てください．

＊PPDL勉強会のweb上での案内
http://www.geo.titech.ac.jp/nakashimalab/hirono/pp.html
東工大・理工・広域理学講座（地球惑星科学）・中嶋研のホームページ
http://www.geo.titech.ac.jp/nakashimalab/nakashimalab.html

常時投稿をお待ちしております．院生コーナーの編集は，現在，以下の2人で行っております．e-mailでいただければ幸いです．

698g5040@mn.waseda.ac.jp　**島田耕史**（早大）
moriya@gbs.eps.s.u-tokyo.ac.jp　**守屋和佳**（東大）

委員会だより

☆日本地質学会環境地質研究委員会

第10回環境地質学シンポジウムの開催と講演論文募集のお知らせ

環境地質研究委員会では，日本情報地質学会と日本鉱物学会（ともに交渉中）との共催で下記のシンポジウムを開催します．

このシンポジウムは，環境地質に携わる方々から広く調査研究発表を募り，投稿された論文について，それらの内容から数セッションに区分したプログラムを組みます．そして，講演にはできる限り時間を配分するようにし，各セッション終了ごとに討議を実施します．

本シンポジウムは独自会計で実施しており，地質学会会員・非会員を問わず，関係各位の積極的参加を期待します．

記

期　日：2000年11月13日（月）14日（火）

会　場：早稲田大学国際会議場会議室　（JR山手線・西武新宿線「高田馬場」駅から都営バス「早大正門」行で「西早稲田」下車，徒歩3分・地下鉄東西線「早稲田」駅下車，徒歩10分）

講演論文内容：地球環境・湖沼の成因と環境・海洋環境・海水準変動および潮位変動・地層の液状化と流動化・地盤沈下・地質汚染（地下水汚染，地層汚染，地下空気汚染，底質汚染）・廃棄物（廃棄物堆積構造，廃棄物層基底問題，廃棄物層からなる地盤の有効利用とそのメンテナンスなど）・水文地質環境・現世堆積物（人工地層など）・地震地質および地殻変動（活断層，異常震域など）・震（振）動地質（各種地層における波の伝播特性など）・都市地質・防災地質・斜面崩壊・火山災害・災害予測・地質環境計測とその測定手法（地盤沈下観測，地下水位観測，地下水質測定，測地，地震動観測など）・地質環境損害と保険・法地質学・地下水盆管理・環境影響評価と環境資源管理・地下地質環境の大規模利用とそのメンテナンス（大規模地下開発，環境鉱山など）・広域土地利用とそのメンテナンス（大規模宅地造成，ゴルフ場開発など）・地質環境へのリモートセンシングの応用・地質環境に対するシミュレーション・環境教育・環境倫理など．

講演申込み要領：

1）申込み方法：講演は同一発表者2題まで受け付けます．下記様式にて，2000年9月10日までに，FAX．あるいは葉書にて申し込んでください．発表講演数1題の場合は下表1欄に，2題の場合は1，2欄それぞれに記入してください．

（講演申込様式）

第10回環境地質学シンポジウム発表申込書

1	題　名	
	発表者	（連名可）
	内　容	（簡単に）…プログラム作成のとき，参考とする
2	題　名	
	発表者	（連名可）
	内　容	（簡単に）…プログラム作成のとき，参考とする
原稿用紙送付先		〒)))
住　所		
氏　名		

2）申込書受領後，講演論文原稿用紙および執筆要領を送付します．

3）講演論文は，環境地質研究委員会所定の原稿用紙に4枚または6枚（5枚は不可）でまとめ，2000年10月10日までに提出してください．

4）論文は，邦文または英文で書いてください．なお，邦文論文については，英文要旨1枚をつけるとともに，図・表のキャプションは英文で書いてください．

5）講演論文集は，原稿をそのままB5判にオフセット印刷します．

6）なお，論文講演者には，別刷り50部を進呈します．

講演申込み先：

日本地質学会環境地質研究委員会
〒101–0032 東京都千代田区岩本町2–8–15　井桁ビル
電話 03–5823–1150　Fax 03–5823–1156

会費（予定）：

1）講演および参加　1．題講演の場合　5,000円
　　2．題講演の場合　5,500円
（これらには，参加費・論文集代・別刷り代を含みます）

2）参加のみ　参加費（論文集代含む）4,000円

＊なお，申し込みは環境地質研究委員会ホームページからも可能です．
アドレスは，http://www.bekkoame.ne.jp/~jcenvgeoです．

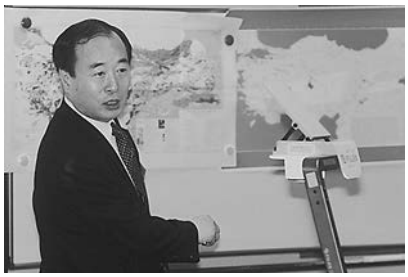
☆関東支部

講演会「地震と活断層」および2000年関東支部総会報告

5月13日（土）13：00～16：30，東京都北区の北とぴあにて，講演会および関東支部総会が行われました．出席者57名，委任状109通で関東支部総会は成立（定足数92名）し，議題の1999年度活動報告，会計報告（1999年度決算，2000年度予算），2000年度活動方針は承認されました．審議にご協力有り難うございました．

講演会は，昨年海外で発生した地震断層を伴う大地震にスポットをあてて，地震と活断層（トルコと台湾を例にして）というテーマで，支部総会をはさんで2人の講師の方に講演をして頂きました．いずれも活発な質疑応答が行われ，有意義な時間を過ごす事ができました．ご多忙中にもかかわらず，今回の講演会で貴重なご講演をして頂いた講師の方々および参加者の皆様に，厚くお礼申し上げます．

遠藤　毅　関東支部長



加藤碩一氏

太田陽子氏

1.　**講演会：北アナトリア地震紀行（トルコの地震と活断層）**
地質調査所次長　加藤碩一（ひろかず）氏

講演者の加藤碩一氏は，日本人として初めて北アナトリア断層全域の概査を行い，1999年8月17日のコジャエリ（イズミット）地震後の9月にも緊急調査を行いました．

講演内容はトルコの地質構造区やプレートテクトニクスの話題から入り，右横ずれの北アナトリア断層や左横ずれの東アナトリア断層（両者はプレート境界に発達するトランスフォーム断層），それ以外の地震を起す活断層（東西性のスラスト群，北北東－南南西～北東－南西性の左横ずれ断層群，北西－南東性の右横ずれ断層群，南北性の引っ張り裂かないし正断層群）の活動について，具体的な地震と地震断層をあげて説明されました．断層の特徴として，幾つかの多重雁行配列するセグメントに分けられること，雁行配列する断層セグメントの間にはプルアパートベイスンが見られること，一部にはクリープ性変位が見られたり，第四紀火山岩体が断層線上に直線的に配列している場所もあること．災害面では，断層上は湧水があるためどうしても集落が集中する傾向があること，トレンチ調査などから地震の周期が短くとも200年程度で地震の教訓は引き継がれていない事，地震の被害は断層の上盤側が目立つ事などの話題があげられました．

今回のコジャエリ地震については，地震断層は9つのセグメントに分けられ，全長145 km,垂直変位を伴う右横ずれ変位で，見かけの最大横ずれ変位は約4 m．被害は建造物に集中しましたが，原因としてコンクリートの品質，鉄筋の不足，施工不良，耐震設計の不足や軟弱地盤などが複合して生じたとのことでした．同年11月12日のデュズジェ地震は，8月17日の地震断層の東側延長部の割れ残りの破壊で，発生の懸念を指摘した現地報告書の提出2日後に発生した地震だったそうです．地震断層は見かけ73 kmですが，西側30 kmは重複している可能性もあるそうです．

2.　**講演会：台湾，921集集大地震による地震断層から何を学ぶか**
横浜国立大学名誉教授　太田陽子氏

講演者の太田陽子氏は地震発生直後の，9月23日以降講演会の日まで，5回にわたって地震断層の観察を行いました．また集集地震発生以前にも現地の活断層に関する研究を行っていましたが，今回の地震断層は，その時に記録した活断層と見事な一致を示したというまれな機会を提供しました．

講演は次の5つの観点から述べられました．

1）地震断層の位置の予測は可能である

前述のように，今回現れた地震断層（車籠埔断層，長さ約100 km）は，空中写真判読によって記録した活断層の位置と驚くほどの一致を見せました．

2）同一地域で活断層は繰り返し起こる

今回の地震断層では，多くの地点で活動の累積性が明瞭になりました．草屯東方では主断層（車籠埔断層）とその東の副断層が段丘面を切っていますが，古い段丘ほど変位量が大きくなっています．また副断層が主断層の約40％の変位という関係が見られますが，これも今回の地震断層の変位の割合と一致しました．

3）副断層も地震で活動した

今回の地震では，車籠埔断層の東側に前述のように副次的な地震断層（back thrust, antithetic fault）が同時に現れました．

4）断層に沿っては上盤側に建物の被害が集中する

断層上盤側のしかも断層からせいぜい30 m程度以内の狭い範囲に被害の集中が見られました．

5）断層トレース，崖の断面形は断層活動の性質を直接表現している

マスコミでも取り上げられた光復国民中学背後のグラウンドの地震断層は，台湾到着直後に観察した場所でしたが，一目見て分かるような典型的な東上がりの低角逆断層による変形でした．

今後は，現地で台湾大学の黄教授らとともにトレンチ調査を行う予定だそうです．

豊富な図表と丁寧な解説からなる今回の講演要旨集（A4判，30ページ）は，日本地質学会事務局で1冊500円で販売しています．

日本地質学会関東支部

支部長：遠藤　毅（基礎地盤コンサルタンツ）

会計幹事：中山俊雄（東京都土木技術研究所）

幹事：青野道夫（有限会社青野地質コンサルタント）・安藤　伸（応用地質株式会社）・飯沼達夫（日本工営株式会社）・猪俣道也（東京農業大学）・上砂正一（明治コンサルタント株式会社）・緒方信一（中央開発株式会社）・笠間友博（神奈川県立茅ヶ崎高等学校）・佐藤賢司（千葉県地質環境研究室）・佐藤尚弘（明治コンサルタント株式会社）・鈴木喜計（君津市環境部）・手塚裕樹（アジア航測株式会社）・中澤　努（地質調査所）・府川宗雄（東京都立千歳高等学校）・向山　栄（国際航業株式会社）・山本高司（川崎地質株式会社）

事務局：〒101-0032東京都千代田区岩本町2-8-15　井桁ビル6F
日本地質学会事務局内　電話　03-5823-1150

（笠間友博　記）

☆関西支部

関西支部例会の報告

関西支部では下記のように例会を開催した．当日は40名が参加し，12の講演が行われた．終了後は京都大学近くの百万遍で懇親会を開いたが，若手の参加者も含めいろいろと話が盛り上がった．なお，今年末までに鳥取大学で西日本支部との合同例会を開催する予定である．

期　日：2000年4月22日（土）
時　間：午後1時30分から6時
会　場：京都大学大学院理学研究科地質学鉱物学教室　第1講義室

●個人講演

⑴ 古琵琶湖の出口……清水大吉郎
⑵ 東海-古琵琶湖層群中部の三大基準火山灰層……松葉千年
⑶ 古琵琶湖層の藍鉄鉱……中野聰志（滋賀大学），藤本あゆみ（草津市立松原小学校），児玉秀之（大津警察署），田賀隆一（滋賀大学）
⑷「松葉の気孔にみる大気汚染」……武蔵野　實（京都教育大学），依田真澄（長野中央ホーム），長榮克和（龍谷大学）
⑸ 知多半島礫ケ浦の中新統中深海成層にみられるセイスマイト・ツナミアイトサクセッション……志岐常正，山崎貞治（大阪教育大学），山岡雅俊（東中学校）
⑹ 知多半島中新統のに伴う三種類の砕屑岩岩脈……山崎貞治（大阪教育大学），志岐常正
⑺ 新しい小断層解析法……山路　敦（京都大学）
⑻ 近畿地方で新たに確認された白亜紀アダカイト質花こう岩……貴治康夫（大阪府立箕面東高校），村田　守（鳴門教育大学）
⑼ 丹波篠山地域のペルム紀層状チャートの放散虫生層序……山中雅之（大阪市立大学）
⑽ 岐阜県鵜沼産のマンガンノジュール中のジュラ紀中世放散虫化石群集の多様性……西原ちさと（大阪市立大学）
⑾ ジュラ紀中世～新世の付加帯砂岩組成―内帯と外帯のモード組成比較……楠　利夫（同志社中学校）
⑿ 紀伊半島東部の秩父帯西半部におけるチャート砕屑岩シークエンスからなるジュラ紀付加帯……柏木健司（大阪市立大学）

（庶務係　神谷英利）

The Island Arc

The　Island　Arc だより

9月中旬発行予定の第3号（Volume 9, Issue 3）の構成は，以下の特集号を予定しています．現在著者校正中で，ほぼ予定通りの発行が見込まれます．今回の特集号は，カザフスタン北東部のコチェタフ変成帯に関する岩石学・構造地質学的検討をとりまとめたものです．スタンフォード大のLiou氏の編集に，当アイランドアーク編集委員会から坂野AE（アソシエイトエディター）が加わった特別編集体勢により制作されました．なお，正式な著者名・ページ数等は校正が終了次第，再度お知らせします．なお，本年はもう2件の特集企画が承認されており，残りページ数との関係で次号4号（Vol. 9, Issue 4, December 2000）にさらに1件の特集を掲載する可能性があります．

Special Issue：Petrotectonic Characteristics of the Kokchetav Massif, northern Kazakhstan
Guest Editors : *Shohei Banno and J. G. Liou*

Liou and Banno : Preface to petrotectonic characteristics of the Kokchetav Massif, northern Kazakhstan.

Kaneko et al. : Geology of the Kokchetav UHP-HP metamorphic belt, northeastern Kazakhstan.

Theunissen et al.: Two contrasting domains in the Kokchetav megamelange :Difference in exhumation mechanisms of UHP crustal rocks or a result of subsequent deformation.

Yamamoto et al. : Kinematic analysis of UHP-UP metamorphic rocks in Chaglinka-Kulet area of the Kokchetav complex, central Asia.

Ishikawa et al. : Subhorizontal boundary between ultrahigh-pressure unit and low-pressure unit in Mt. Sulu-Tjube area, Kokchetav, Kazakhstan ".

Ohta et al. : Thermobarometric structure of the Kokchetav UHP-HP massif from a north-south transect in the Kulet and Saldat-Kol regions, northern Kazakhstan.

Masago : Metamorphic petrology of the Barchi-Kol metabasites, western Kokchetav UHP-HP massif, northern Kazakhstan.

Okamoto et al. : Petrology of the diamond-grade eclogite in the Kokchetav massif, northern Kazakhstan.

Ogasawara et al. : Diamond-bearing and diamond-free metacarbonate rocks from Kumdy-kol in the Kokchetav Massif, Northern Kazakhstan.

Katayama et al. : Prograde P-T records of inclusions in zircons from UHP-HP rocks of the Kokchetav massif, northern Kazakhstan.

De Corte et al. : Diamond growth during prograde UHP metamorphism of the Kokchetav massif (northern Kazakhstan)?

Maruyama and Parkinson : Overview of the geology, petrology and tectonic framework of the HPUHPM Kokchetav massif, Kazakhstan.

アイランドアーク誌の送付先は，ブラックウエル社の契約発送会社が管理しています．勤務先異動等に伴う雑誌送付先の変更は，地質学会事務局からこちらの発送会社に通知をしなければ正しく変更されません．地質学雑誌は届いているのに，アイランドアークが届かなくなった，等の場合には，まずは地質学雑誌だけでなくアイランドアークの送付先変更も別途連絡をされたかどうかご確認ください．毎年秋の地質学会ニュース誌（昨年の場合，9月号から11月号）に掲載されている「アイランドアーク新規購読・変更届け」用紙にその内容を書いて，学会事務局宛に早急にお送りくださいますようお願いします．

特に年度途中での住所変更の際には，地質学雑誌の宛先変更が自動的にアイランドアーク送付宛先に反映されるわけではありませんのでご注意ください．上記届け用紙が不明な場合には，新しい送付先の住所とご氏名の英文表記をお忘れなく，メールないしファックスで学会事務局までご連絡ください．

The Island Arc**編集委員長**
小川勇二郎（筑波大学，電話　0298–53–4307, Fax : 51–9764, E–mail : yogawa@arsia.geo.tsukuba.ac.jp）
巽　好幸（京都大学，電話　0977–22–0713, Fax : 22–0965, E–mail : tatsumi@bep.vgs.kyoto-u.ac.jp）

The Island Arc**編集事務局長**
徳橋秀一（地質調査所，電話　0298–61–3676, Fax : 61–3666, E–mail : toku@gsj.go.jp）
渡部芳夫（地質調査所，電話　0298–61–3677, Fax : 61–3666, E–mail : nabe@gsj.go.jp）

追　悼

名誉会員　橋本　亙先生を偲ぶ

本会名誉会員東京教育大学名誉教授の橋本　亙先生は平成12年5月15日胆管ガンのため永眠された．先生は1911年北海道小樽市に生まれ，旧制成渓高等学校を経て旧東北帝国大学理学部地質学・古生物学科に進まれ，卒業研究として矢部長克教授のもとで，「空知層群の層序と構造地質」を精力的に研究された．卒業後アメリカの会社に就職され，フィリッピンの地下資源の開発に当たる傍フィリッピンの燃料資源の調査に奔走され，その成果は後に「フィリッピン群島燃料鉱物の地質（1937～8），栗田書店」として出版された．

満洲事変から日中戦争へと軍事情勢が急変する頃，海軍軍属として応召され，故浅野　清教授らと一緒にメキシコ油田の開発に従事され，日米開戦の直前に帰国された．太平洋戦争の進展に伴い多くの石油地質家と共にジャワ・スマトラの油田の調査・開発に専念された．戦後は出身地の小樽に帰り，橋本地質調査所を設立し，戦後の復興のための地下資源開発関係の調査に専念された．この間の調査の成果は「二十万分の一北海道地質図，1958」として北海道地下資源調査所から出版された．

1956年，東京教育大学教授として理学部地質学鉱物学科に迎えられ，地史学・構造地質学を担当された．先生はこれまで実地に研究された成果を基盤にして若い学生の教育に心血を注がれ，フィールドワークを重視しながら常に先頭に立って懇切に指導された．北海道の羽幌・古丹別・添牛内・朱鞠内付近の調査（1961～1963）では殆どテント生活の連続だったが，この調査の成果は「五万分の一添牛内地質図幅同説明書」として北海道開発庁から出版された（長尾捨一氏等と共著）．今にして思えばこの調査に際してヒグマとの遭遇事故がなかったのが不思議に感じられるほどである．

添牛内図幅の調査が終わると更に北側の中川郡中川町付近に調査地域を移し，1963～1966年にわたり天塩山地に分布する中生界・新生界の地質構造とその発達史の解明に専念された．卒業研究として毎年数名の学生を連れて調査に入り，ランプの灯火の下でフィールドノートやルートマップの整理を続けた天塩山地の調査は，都会生活に慣れ親しんだ学生諸君には格別の印象を与えたようだった．これらの調査結果は「北海道中川郡中川町の地質及び地下資源，並びに五万分の一中川町地質図（1967）」として発表された（長尾捨一氏らと共著）．

1962年に小林貞一教授を代表として「東南アジア古生物研究会」が発足した．本会員の研究成果は“*Geology and Paleontology of Southeast Asia*”として小林，鳥山，橋本の三教授の監修のもとに全25巻刊行された．このプロジェクトは1962～1980年の間に18回の海外現地調査を実施したが，橋本教授はこの間11回にわたり研究代表者を務め，台湾，フィリッピン，インドネシア，東マレーシア（サラワク）の現地に渡り，調査の指揮や研究の取り纏めに活躍され，ご自身でも40編（共著を含む）余りの論文を発表されている．

東京教育大学に在職時は教育大の筑波移転問題を契機に学園紛争が荒れ狂い，落ち着いて研究・教育も出来かねる程だった．先生は筑波移転のマスタープラン作成委員会の主要メンバーとして移転の推進に大きく貢献された．

1974年3月東京教育大学を定年退官後は千葉大学教授として理学部地学科に迎えられ，応用地学講座を担当された．千葉大学を定年退官後はK.K.資源コンサルタントの顧問に迎えられ，主に石灰石関係の資源開発に貢献された．先生の学内外におけるこのようなご功績により，1984年11月勲三等瑞宝章を授与された．

先生は退職後もフィリッピンの地質構造発達史の総括に全力を傾注され，これまでの既報の文献の再検討と共に，ご自身の調査結果に基づく調査地域の層序と地質時代の詳細な再検討から構造発達史の再構築を意図されてきた．執筆の途中には再三にわたり新資料が発見され，その都度原稿の加筆訂正があって，最終的には二千数百ページに及ぶ膨大な原稿となった．論文の取り纏めに余りに熱中された為か昨年暮頃から体に変調を感じられるようになったので，今年の3月検査のために入院された．精密検査の結果，輸胆管内にガンが発見され，2か月あまり入院治療に専念されたが，その甲斐も無く去る5月15日ご家族に看取られながら不帰の客となられてしまった．享年八十八歳．誠に天寿を全うされたものと思われる．

ご経歴を伺うと先生は如何にも頑健な方のように思われるが，先生のリュックにはいつも薬箱と注射器が入っており，持病の糖尿と喘息の発作に備えておられた．テントのランプの下で時折ご自身で注射をされながら，厳しいフィールドワークを続けておられるお姿には全く頭が下がる思いだった．このような真摯な学問探求のお姿は先生の薫陶を受けた若い地質家を通じて末永く受け継がれるものと思っている．

先生はご立派なご家族に囲まれ，ご自身の好きな道をひたすら追求して数多くの業績を挙げられ，多くの後継者を養成された優れた教育者といえると思う．ただ唯一の心残りは先生が長年心血を注がれてきたフィリッピン群島の地質構造発達史の脱稿を目前にして逝去されたことであろう．しかし，この点は私達後進のものがお側に伺う頃には立派に出来上り，論文完成までの苦労話などを伺う日のあることを楽しみにしている．先生どうぞ安らかにお休み下さい．心からご冥福をお祈り申し上げます．

奥様は従前どおりご令嬢ご一家と同じ屋敷に住まわれ，二人のご子息もそれぞれ独立されてお元気に過されている．

連絡先〒178–0063 東京都練馬区東大泉3丁目23–7
橋本廣子様

（菅野三郎）

追悼　柴草英彦博士

藍閃石片岩論争史逸聞：

藍閃石片岩の代表的産地のひとつはどこかと聞かれたら，迷わずに神居古潭帯の江丹別峠をあげる．旭川から北西に江丹別の街を通り抜け，峠にいたると，幌加内盆地が一望できる．峠を下り始めると右手に結晶片岩の露頭があらわれ，みごとなNa角閃石の結晶が肉眼でみられる．遅い春を迎えた江丹別峠のこの露頭も今は緑に包まれ始めたであろう．この地の藍閃石片岩の鉱物共生関係を藍閃石分子の含有量の関数として示すことに成功し，江丹別の藍閃石片岩を世界的に注目させたのはMineralogy and Petrology（vol. 40, 1989）誌上に発表された神戸育英高校の柴草英彦論文（Lawsonite-pumpellyite-epidote stabilities in glaucophane schists in the Horokanai-Kamietanbetsu area of Kamuikotan zone, Hokkaido, Japan）であった．その成果を柴草は1994年の北大で行われた地質学会の巡検案内書（神居古潭帯）にも載せている．柴草のこの地の最初の研究は1974年の地質学雑誌に公表された．以来，柴草はここから神居古潭変成帯の変成条件を特徴づける重要な論文を発表してきた．江丹別峠は柴草の研究の出発点であり，屈折する感情を乗り越えて，ついには輝かしい成果を誇るにいたった栄光の地である．しかし，柴草は，この地を再び訪れる機会を永久に得ること無く,3月9日午後10時3分，神戸にて56歳の生涯を駆け抜けていった．41歳のときに腎臓を癌に侵され，さらに1997年には新たに胃癌が見つけられ，以来闘病生活を続けながらも，ひたすらに藍閃石片岩類の研究に邁進し続けた彼は，死の床にあっても最後まで前川寛和との共著論文の完成を気にかけていた．死を目前にしながら，彼は今年に限ってすっかりおそくなってしまっていた年賀状に「元気にがんばっております．正月には退院して家に戻ることができ，また長男の結婚式に出席することもできました」と書いてきた．

柴草は1965年に北海道大学の地質学鉱物学科で鉱床学講座を主宰していた舟橋三男の門をたたき，卒業論文として神居古潭変成岩の研究を始めた．彼は修士課程で幌加内地方の藍閃石片岩類の鉱物共生関係と造岩鉱物の光学的諸性質を記載し,修士の学位を得た後，博士課程に進むことなく，山口佳昭の紹介で神戸育英高校の教員となった．しかし，柴草は幌加内地方の高圧変成岩類の研究を断念することはなかった．神戸大学の中島和一，田結庄良昭らのゼミに参加し，また，小松正幸（当時，新潟大学）のもとに通ってEPMA分析を続け，進学できなかった逆境を乗り越えて研究の情熱をもやし続けた．その後も機会をみてはいろいろな人の下に教えを請いに出かけた．山口らとは連名でNatureに論文を発表し，育英高校の同僚の田辺行雄らとはSchreinemarkers' bundleの解析方法をコンピューターで利用できるようにプログラムを開発した．平島崇男とも神居古潭帯の高圧変成岩の圧力条件を決める研究を深めた．Gibbs methodが注目されると，これを教えて欲しいと一回り以上も若い後藤　篤に頼み込み，少しでも深く相平衡岩石学を理解しようとした．この時，柴草はすでに自身の余命が幾許もないことを知っていたはずである．

柴草にとって幸いな事は京都大学の坂野ゼミに参加でき，1989年には坂野昇平から学位を得たことであった．しかし，その過程は容易なものではなかった．坂野に研究を評価されるまでには中島隆から鉱物組み合わせの解析方法を繰り返し学ばなければならなかった．そしてさらに，フィールド・ワークをやり直さなければ彼の気が済まなかった．完成された学位論文の中心部分が上述のMineralogy and Petrologyに発表された論文であった．この，神居古潭帯の変成岩に関するもっとも優れ，かつ美しい論文は，かくして，大学を離れた柴草の一途な情熱を基調に，それを支える人々の協力の上に成り立ったのである．

柴草は博士課程進学を志したが，受け入れてもらえなかった．修士論文のあら捜しは教官からみれば容易い．進学を受け入れない理由はいくらでもつけることができたであろう．しかし，当時まだ，藍閃石片岩の成因についてNa交代作用によるものだとし，低温高圧型という考えを受け入れようとしないで論争が続いていた（Eskolaの段階では何十年も前に解決済みのことなのだが）という事情を知るものにとっては，柴草を受け入れないことは都城流の成因論を拒否するためであるように思われた．柴草は幌加内地方の藍閃石変成帯の変成分帯を行ない，坂野・羽田野の分帯を修正していた．しかし，分帯したこと自体がすでに軌道から外れていた．そして，彼の仕事は評価されなかった．

柴草が北大を去ったあと，舟橋は「江丹別の藍閃石には特別な思い入れがあるのだ．藍閃石が見事な線構造を示すかと思うと，その下にはばらばらになった藍閃石がある．一体，どうしてそんなことが起きるのか，そのことを調べてもらいたかったのだ，藍閃石片岩相はそれはそれでいいんだ」と語ったことがある．舟橋は藍閃石片岩はNa交代作用によってできると考えていた．するどい感性の持ち主であった舟橋は江丹別峠の藍閃石の産状にひどく興味をもっていたのである．その岩石が鉱物の化学組成という面からのみ語られることに満足できなかったのだ．舟橋は，人が藍閃石片岩相という用語を使うことは良しとした．しかし，自分の考えはゆずらなかった．1995年に出版された舟橋の終生の大作である「地球の成立」でも神居古潭帯の藍閃石の成因は緑色片岩相とNa交代作用で終始している．同時に，彼は自分の考えを人に押し付ける気はなかった．舟橋は，立場はどうあれ柴草が博士課程で研究を続けることを望んでいたという．博士課程進学の判定会議で，柴草を推薦する舟橋の意に反して，結果が「否」と出たとき，舟橋の顔色が一瞬変わったのをみた人がいる．無神論者であったろう舟橋は，晩年，地元の教会に姿を現わしている．クリスチャンである夫人を車椅子に乗せて教会の礼拝に参加するためであった．昨年12月の舟橋の葬儀では，牧師は彼の奉仕の精神はキリスト者に通じると述べ，舟橋はキリスト者として天に召された．

神居古潭帯を蛇紋岩帯として特徴づけた舟橋の包括的研究と柴草の藍閃石片岩の研究は，1930年代の鈴木　醇の研究とともに，神居古潭帯の研究史上長く記憶に留められるべきである．しかし，舟橋と柴草はお互いを理解しあうことはなかったのかもしれない．ともに藍閃石片岩に魅せられながら，論争の渦中にあって断絶したままであったのは人の世の常であるかもしれないが，柴草に舟橋の真意を理解させられなかった私の無力を今，悔いている．

柴草の藍閃石片岩の研究は京大への学位論文提出後，世界へと広がっていった．北米西海岸のフランシスカンの前川との共著論文は1997年に公表されたし，Banno,Shibakusa, Enami, Wang & Ernstの論文は，近くAmerican Mineralogistに公表されるであろう．そして，これらの柴草の一連の研究の延長上には藍閃石の成長過程を克明に描く研究が現われるのであろう．

5月14日，田結庄らの世話で西神戸のホテルで柴草を追悼する10人程の会が一枝夫人と次男哲朗君の参加のもとに開かれた．そこには北大の先輩で，かつてプルトニック・グループのゼミで机を並べた吉田　勝，北大の後輩で中学教育に情熱をもやす菊本　格，そして高校教育に携わりながら田結庄ゼミにも参加している木村一成の姿もあった．後日，根室高校の同級生でもあった夫人から「これからは私は夫の分も生きることを楽しんで,歩んでいこうと思います」との便りがあった．

（5月27日，渡辺暉夫）

2000年度 新役員紹介

今年の投票率は前年度に比べ1.2ポイントあがり33.8％でした．選ばれた方々には“ミレニアム”役員としてのご活躍を期待しています．また，学会員の方々にも学会活動へこれまで以上の参画・ご協力をお願いいたします．

（日本地質学会2000年度
選挙委員会委員長　手塚裕樹）

会　長

小松正幸（こまつまさゆき）
（愛媛大学理学部）

今期は新会則への移行期間であり，21世紀への橋渡しの時期です．新しい運営体制を準備すること，事務局と財政の強化，会員および社会的サービスの向上，JABEEへの対応と他学会との連携が主要な課題です．因循を廃し，問題を先送りすることなく，着実に前進することが最大の課題です．

今後，地質学は防災，資源，環境保全を主題とする地質環境科学へシフトすることが予想されます．学会の組織，運営，活動は従来のアカデミーに偏ることなく，これからの実践的側面に対する学問と技術の向上，普及教育がバランスよく配されたものにする必要があります．

副会長

平　朝彦（たいら　あさひこ）
（東京大学海洋研）

地質学を取り巻く状況は，確かに厳しいものがありますが，同時に新しい発展への胎動も始っています．地質学会を中心に，地球生命科学の創成を目指した力強い取り組みが可能であると確信しています．

副会長

徳岡隆夫（とくおかたかお）
（島根大学総合理工学部）

あと1期続投させていただきます．懸案の会則改正が成立し組織運営の基本方向は定まりましたが，これを肉付けするのが今期の課題です．107年の歴史をもつ学会の発展と地質学のステイタスの向上に努力します．

評議員

赤羽久忠（あかはねひさただ）
（富山市科学文化センター）

急激に変動する現代社会に的確に対応し，地質学の重要性が社会的に認められるよう，地質学会の活性化に努力したい．学校教育や博物館・自治体に働く地質学会会員の研究条件改善にも努めたい．

評議員

足立勝治（あだちかつじ）
（アジア航測(株)）

2年間の執行委員長経験を通して学会の人的資源の豊富さを感じ，組織力を発揮することの難しさも痛感した．この教訓を活かし民間企業の立場から，学会がさらに社会に認められるよう執行委員として取り組みます．

評議員

荒戸裕之（あらとひろゆき）
（帝国石油(株)）

地質科学の重要性の普及に努め，技術者・研究者の社会的地位向上と活躍の場の確保を目指すとともに，産学協同を基調として社会をリードし社会の要請に応えることのできる学会活動に寄与すべく努力する所存です．

評議員

磯﨑行雄（いそざきゆきお）
（東京大学大学院総合文化研究科）

フィールドワークに根ざした地球科学こそが，現代の混迷する世界で最も輝いているべき学問領域だと信じます．物理学，化学や生命科学に伍する先端領域を切り開き，有能な若手研究者を引き付けるべく努力します．

評議員

板谷徹丸（いたやてつまる）
（岡山理科大学自然科学研究所）

地質学会を良くするも悪くするも会員．会員から選ばれた評議員は責任を自覚し事に当たるべき．この当たり前のことがなされていないのが今の地質学会．この二年間さらに憎まれ役を買ってでるつもりです．

評議員

伊藤谷生（いとうたにお）
（千葉大学理学部）

国立研究機関が独法化され，国立大学もその波が押し寄せているなかで，歴史的判断を誤らず，しかも未来を開拓できるよう力をあわせたい．

評議員

井内美郎（いのうちよしお）
（愛媛大学沿岸環境科学研究センター）

最近，以前にもまして様々な環境問題に対して人々の関心が高くなっています．環境問題の解決における地質学の優位性を具体的な実績をもとに明らかにすると同時に，新しいマーケットの開拓を目指します．

評議員

菊地隆男（きくちたかお）
（東京都立大学理学部）

第四紀学は地質学の一分野であると同時に，関連諸科学との橋渡しの役目を担っています．第四紀学の発展が地質学会の発展にもつながることを確信し，その努力をしたいと思います．

評議員

木村　学（きむら　がく）
（東京大学大学院理学系研究科）

地質学は多様な人で構成，各々の視点から期待が異なるのは自然だが，殆どの会員の一致する期待は学会に参加すると「大きく広がる夢が見える」ではないか？多くの会員と「夢作り」に微力ながら尽力したい．

評議員

久保和也（くぼかずや）
（地質調査所）

地質学会が地質学に係わる広範な分野の人々にとって，実際に役に立つ交流・研鑽の場となるように務めたいと思います．

評議員

公文富士夫（くもんふじお）

（信州大学理学部）

4月にJABEEに加盟したが，この制度に対応できる学会運営・組織の整備を各大学における教育改革と連携してすすめることが最重要課題の1つと考えている．多くの会員のご協力をお願いします．

評議員

髙須　晃（たかす　あきら）

（島根大学総合理工学部）

10月までは地質学会松江大会の準備に集中します．地質学が研究者はもちろん，多様な会員にとっても一般国民にとっても面白く，魅力的でなければなりません．地質学の将来を担う若手が活躍しやすい環境をつくりたい．

評議員

鳥海光弘（とりうみみつひろ）

（東京大学理学部）

地質学を今後地球惑星科学の主要な分野として育てるためには，現代の地球惑星科学の主要なテーマについて十分な把握と今後のフィールドサイエンスの基礎的な事柄について学会の寄与を促してゆきたい．

評議員

斉藤尚人（さいとうなおと）

（千葉県立富里高校）

地学教育の問題は，地質学界の未来を左右する，100年の計の問題だと思います．21世紀の地質科学の研究と地学教育の問題を，教員という立場で考え活動していきたいと考えています．

評議員

髙橋正樹（たかはしまさき）

（茨城大学理学部）

21世紀の地質学と日本地質学会の一層の発展のために，学会の財政的基盤の健全化と普及教育出版事業体制の確立をめざして，微力ながら努力したいと思います．

評議員

新妻信明（にいつまのぶあき）

（静岡大学理学部）

1年間の研究成果を携え全国から年会に集う地質学会会員が常に抱いている「地質学の発展」「地質学の社会・人類への貢献」についての夢を実現できる新地質学会体制の確立に尽くす所存です．

評議員

佐々木和彦（ささきかずひこ）

（応用地質（株））

これまで評議員というより執行委員（会計委員長）として，主に学会の会計と財政改革を担当してきました．今期も実りある財政改革を進めていく所存ですので，ご協力よろしくお願いいたします．

評議員

髙安克己（たかやすかつみ）

（島根大学汽水域研究センター）

新しい時代に対応した地質学の進むべき道を模索しつつ，社会に貢献できる地質学の体制づくりに微力ながら努力したい．

評議員

廣野哲朗（ひろのてつろう）

（東京工業大学地球惑星科学専攻）

研究室や教室，大学の枠を越えた院生主催のセミナーを企画し，これからの地球科学を若手で話し合っていければと思います．人類や科学において何が求められていて何をすべきなのか？　自分は本当は何をしたいのか？

評議員

佐瀬和義（させかずよし）

（池袋商業高校）

さまざまな自然災害や環境問題の存在する日本列島において地学教育の役割はますます大きくなっているが，学校では十分に位置づけられているとはいえない．地学教育の条件づくり，地質学の普及のために力を尽くしたい．

評議員

田崎和江（たざきかずえ）

（金沢大学理学部）

地球環境問題の研究，教育，普及に取り組みます．女性科学者の未来を考える研究委員会を強化し，女性の研究環境の改善や研究の場の確保に努力します．また，2001年の地質学会（金沢大学）の成功のために尽力します．

評議員

別所孝範（べっしょたかのり）

（大阪府立清友高校）

環境教育や防災教育の重要性が叫ばれているが学校教育において，地学の地位は依然低く，新教育課程においても地学の存続が危ぶまれている．私は教員の立場で地学の存続や地学教員の新採について微力を尽くしたい

評議員

柴﨑直明（しばさきなおあき）

（国際航業(株)）

21世紀を目前にして，地質学の果たす役割は，国際的にもますます重要となっています．会員の声が生かされる地質学会の運営と，総合的な学問としての地質学の発展のためにがんばりたいと思います．

評議員

徳橋秀一（とくはししゅういち）

（地質調査所）

先の総会で承認された会則を基に，地質学会の新しい発展のための基盤づくりのために，また，地質学会が主体となって発刊させたThe Island Arc誌の一層の発展のために，微力を尽くしたいと思います．

評議員

渡辺暉夫（わたなべてるお）

（北海道大学理学部）

基礎地殻科学のしっかりした土台と時代の要求に応える応用地殻科学（防災，有害物質や高レベル放射性廃棄物の処理問題などもふくめ）を作り出すために地質学会が果たすべき責任は重いと思います．

2000年度「日本地質学会賞」候補者募集について

本会は会則第3条で，研究の援助・奨励および研究業績の表彰をうたい，具体的には運営細則第9条で各賞の受賞規定を定めております．そのひとつ「日本地質学会賞」の候補者を，下記の要領で広く会員から募集いたします．ご応募いただきました候補者を，各賞選考委員会（委員は評議員の互選により選出されます）が選考し，最終的に受賞者を決定することになっています．応募の締め切りは9月30日，応募にあたり候補者の自薦・他薦を問いません．ふるってご応募下さいますよう，ご案内いたします．

記

運営細則　第9条

1.　本会は地質学に関する優秀な研究業績をおさめた者に対し日本地質学会賞を授与することがある．

応募資格：（イ）　正会員・院生会員もしくは名誉会員

（ロ）　前記の者を代表するグループ

応募方法：下記の書類をそろえて2000年9月30日（土）までに選考委員会あてに提出する．

（イ）　応募書類（所定の用紙による）＊　1部

（ロ）　推薦書（自薦・他薦とも可．ただし，他薦の場合には正会員・院生会員または名誉会員によるものとする．その内容が応募者または応募グループの業績を評価できる程度に詳細なもの）1部

＊ 所定の用紙は，事務局に請求して下さい．

（日本地質学会事務局）

執行委員会だより

2000年度第3回執行委員会

5月15日14：00～20：15の長時間にわたり，第3回執行委員会が学会事務局で開催されました．出席者は立石執行委員長，公文・高橋・佐々木・足立・渡部・荒戸・伊藤・湯浅の各執行委員と水野事務局長であり，徳岡副会長が学会体制の移行に係る検討のために参加しました．

主な報告，議論は以下のとおりです．

1.　日本技術者教育認定機構の第1回総会開催の通知があり，公文第一庶務委員長，三宅日本地質学会JABEEワーキンググループ委員長が出席することとした．
2.　「青少年のための科学への祭典2000全国大会」へ，神戸信和会員の「太古の地球への招待　化石の進化を探りましょう」と阿部国広会員の「川が平野をうめ立てた」が参加することとなった．
3.　地質学雑誌（和文誌として申請）に対する日本学術振興会の平成12年度の刊行補助金の交付内定通知があった．
4.　2000年度の常置委員会などの委員候補者を検討し，第2回定例評議員会に諮ることとした．
5.　地質学雑誌の誤印刷等が発生（内容は地質学雑誌106–5号に掲載済）したことを受け，関係執行委員による印刷会社への訓告，今後の対応などについて検討した．
6.　第106年会松江大会の開催経費について検討した．開催校の自主性は重んじるものの，学会財政が厳しい折，適切な運営をする必要のあることを再確認した．
7.　新運営体制への移行措置についての議論が行われ，移行措置を早くかつ短くするために，松江大会において臨時総会を開催することを第2回定例評議員会に諮ることとした．
8.　第2回定例評議員会の議題等について検討した．

訃　報

本会員の次の方々が逝去されました．謹んで哀悼の意を表します．

名誉会員	正会員
橋本　亙氏（2000年5月15日）	大橋貞彦氏
豊田英義氏（　〃　5月21日）	宗田克己氏
	柴草英彦氏（2000年3月 9 日）
	富永振作氏（　〃　4月29日）